

登場人物
ヤスベ―
カエサル
カシミ
ヒルマ
父（和正）
母（ヨキコ）
小つちやいヤスベ―
もう一人のヤスベ―
田手上（ハジメ）
（ユズル）
スリル亀吉
ナンバ
院長
看護婦 1
2
電報配達
葬儀社社員 1
2
オートメーション工場の主任
 工員たち
 おばさん
刈賀先生
生徒たち
夜の子供バンド
ロボットのロンちゃん
仔猫のフリックス
双児のシャム1号
2号
地球男
銀髪少女ミリアム
怪人笑い仮面

これは、生まれてこれなかった思い、そうなればいいなアと思いながらならずにしまったこと、そのときは思いもかけずにいたこと、やりそこねたことエトセトラをめぐる物語である。いいかえれば、これはマンガである。

ありもしないコト、いもしないモノたちと登場人物とが真剣に格闘する姿はときとしてグロテスクで、ときとしてオカシク、またときとして美シクもあり、そしてそれはマンガである。

だからこの芝居は、異星の野外劇場にいきなり迷いこんだような、そんな気分のなかで始まるのがいい。

異星の野外劇場とは、ちよつと昔に夢見られた遠く懐かしい未来の劇場であり、記憶のなかで自己増殖をつづけるいつも新しい過去の劇場だ。

つまりそこは、冒険するノスタルジアの世界なのである。

プロローグ

客席と舞台の見境もなく、紙の月や紙の星やその他いろいろが散りばめられた劇場。

それらのおかげから、書割りのマンガ然としたキャラクターたちが顔をのぞかせている。どこかでいつか出会ったように懐かしく、そのくせどこにもいそうもない、まるで右脳のオモチャ箱からふってわいたような彼らは、たとえばロボットのロンちゃんであり、仔猫のフィリックスであり、双児のシャム1号・2号であり、地球男であり、銀髪少女ミリアムであり、怪人笑い仮面である。

舞台奥にはベッドが置かれ一人のこれまた少女マンガ然とした少女が眠っている。彼女は、この物語の主人公ヤスベーによつてとりあえず夢見られた二十五年前の「小つちやいヤスベー」である。(たしかに背格好は七歳の少女だし、顔にかぶったマスクには星のまたたくつぶらな瞳)

さて、ペーパームーンやスーパースターやその他いろいろが次第に輝きを増す夜の頃に、芝居は何気なく始まり、書き割りのキャラクターたちが動き出す。笛や太鼓やシンバルやアコーディオンなどを鳴らしながら、この物語の裏方をつとめることになる彼ら「夜の子供バンド」と呼ぶことにする。

あれこれとかまびすしく口論し合いつつ、動き出そうとする物語の準備を始めた夜の子供バンドはベッドで眠りつづける小つちやいヤスベーを抱え上げ、舞台中央に横たえると、そのポーズをためつすがめつし、傍にシガレットとマッチを置き……大真面目に仕事を遂行する彼らの姿は、ほとんど遊んでいるとしか思えない。

そこへ、下手から物語の足音が迫る。

クモの子散らすように夜の子供バンドたち、大あわてで自分の位置へ戻ると再び元の書割りになる。

下手から一人の寝間着姿の少女、ケンケンしながら登場。

少女 (行手を塞いで横たわる小つちやいヤスベーに) 姉ちゃん。……ちよいと姉ちゃん。そないなところでなにしてますねん。

少女の呼びかけにより、物語が動き出した。

(実際の舞台では、少女に応える小つちやいヤスベーの声は、二十五年後のヤスベーによつて、かげで語られることになります)

(小つちやい) ヤスベー ごらんのとおりですわ。

少女 こない道の真中にねてもうてからに。

(小つちやい) ヤスベー ほつといてんか。

少女 いつからこんなんしてますねん。

(小つちやい) ヤスベー 鶴は千年、うちは寝て万年。

少女 しかしながら、これではうちが通れまシェん。

(小つちやい) ヤスベー あんさん、オンでつか、メンでつか、

少女 ヒトを鷄みたいにいわんといて。

(小つちやい) ヤスベー オナゴは通れへんで。こつから先はオナゴに用はないんじゃ。

少女 なんデヤ。

(小つちやい) ヤスベー オナゴはうちひとりでたくさんじゃと和正がゆうたんじゃ。

少女 和正なんて知らん。

小つちやいヤスベー、ムックリと起き、あぐらをかいて傍のシガレットを一本くわえると、マッチで火をつけていた。

少女 (小つちやいヤスベーの隣に座って) なあ、だれやの、和正ゆうてなあ。そや。あんたのコレや。なあんや、そやそや。でっシヤる。

(小つちやい) ヤスベー まあ、あんさんも一服どうぞだす。(ト、シガレットをさし出す)

少女 (パッケージを見て) これは……キンコーモリ。

少女、金蝙蝠を一本抜き出す。

小つちやいヤスベー。マッチをシユ、と擦って。

(小ちやい) ヤスベー マッチ擦るつかのま海に霧深しー。

少女、小つちやいヤスベーのマッチでシガレットに火をつけ、うまそうに紫煙をくゆらせて……。

少女 霧は秋でんな。

(小つちやい) ヤスベー しっかり。春にたつのは霞といいまんな。

少女 (紫煙の彼方の虚空に) さだかに見えぬ中空に、おぼろにたなびく……。

(小つちやい) ヤスベー あんさんみたいや。

少女 なんだす？

(小つちやい) ヤスベー カスミやんけ。

少女 うちがカスミでつか。

(小つちやい) ヤスベー 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。

春風が吹き抜ける。
間。

少女 (ジッ。と小つちやいヤスベーの横顔を見ていて) なんでやろ。よう見ると、あんさん、うち
によう似とるわ。

(小つちやい) ヤスベー やめとき。

少女 でもなんでやろ。なあ。和正ゆうてだれやの。

(小つちやい) ヤスベー グッバイ。

少女 え？

(小つちやい) ヤスベー 帰るんや。あんさん、もう帰り。

少女、泣きながらも来た道を帰りかける。

(小つちやい) ヤスベー (少女の後ろ姿に) メメント・モリ。

少女 (ふりかえり) めめんともり？

(小つちやい) ヤスベー 許してや。……許してや。……

顔見合わせ、たたずむ少女と小つちやいヤスベー。

夜の子供バンド、再びカタコト動き始め、二人のまわりをグルグル巡りながら奏でる懐かしくもグロテスクなネオエスニック・サウンドとともに暗転。

Scene 1 帝王切開

ゆつくりと明転すると、そこは売れない少女マンガ家ヤスベー先生ことナガヨ・ヤスミの仕事部屋。舞台前面下手にうずたかく積み上げられた少女マンガ雑誌の山。その山に半ばうずもれるように仕事机が置かれ、その机につぶしてうたた寝をしていた三十二歳のヤスベーが夢に

うなされていた。後ろからヤスベーの様子をのぞきこんでいる少女。ヤスベーの夢からそのまま抜け出したような少女のままの妹カスミだ。

カスミ どうしたの？

ヤスベー (なおもうなされて) ……。

カスミ ねえ、ヤスベー。

ヤスベー、ハッと目を覚まし、顔を上げると、荒い息をつく。

ヤスベー ……思い出した。

カスミ え？

ヤスベー あの夜のこと。台風がこの街に近づいて……ボクね……ボクね……。

カスミ ねえ、なんのこと？

ヤスベー おまえの生まれた夜のことさ。……カスミ。

遠くはるかに目をやる二人の上いきなりモノスゴい雷鳴が轟いて……暗転。

(以下。物語は舞台前面のヤスベーの仕事部屋と、舞台奥のマンガじみた異空間とがもつれあいながら共時的に進行することになります)

声 (闇の中から) だれじゃ！ お産の最中に電気を消す奴は！

さらに闇の中から二人の女の声が応えて……。

声 1・2 停電です院長。

声 (院長) なに停電！ ええい諸君、なんでもかんでも明かりを持ってッ！

声 1・2 ハイハイ院長。

というや、客席に向かって懐中電灯の明かりが二つ灯り、フラフラと場を移ろって、舞台奥のベッドの上の白い太腿と、その股間にへばりついた禿頭を照らし出す。

懐中電灯をかざしている二人の看護婦。

看護婦 1 見えた。

看護婦 2 見えましたわ、先輩。

看護婦 1・2 院長先生の禿。ハハハ……この禿ッ！

院長、いきなり産婦とおぼしきベッドの太腿の会陰部よりひき抜いた右手をかざせば、又メヌメとドス黒く血塗られたその指先にキンコーモリがとまっている。と見えたのはシガレットのパッケージだった。

院長 だれじゃ。こんなところにキンコーモリをしまっておく奴はッ。(左手をかざし) あまつさえ、

ごていねいにも吸殻まで二つ。

看護婦 1 なんてあきれた出産。

看護婦 2 なんて野放図な産婦。

看護婦 1・2 それにつけてもなんて見事な禿頭。(ト、院長の頭を笑いとばして) ハハハ……この禿ッ。

院長 (さらに会陰部よりラムネの壘をとり上げ) 見ろ。ラムネの壘じゃ。

看護婦 1 なんてあきれたラムネの壘ッ。

院長 (万華鏡をとり上げ) 万華鏡じゃ！

看護婦 2 なんて野放図な万華鏡ッ。

院長 (次から次ととり上げ) 星座早見表じゃ！ 赤い手袋じゃ！ 着せ替え人形じゃ！ リングの首

飾りじゃ！……ウウウ、これはなんなんじゃ。ノスタルジアのバリケードか。

看護婦1 院長先生。脈拍が。

看護婦2 院長先生。出血がッ。

看護婦1・2 産婦が危ないッ。

院長 諸君。帝王切開の準備じゃ。……そもそも帝王切開はなぜに帝王切開といふのか。かつて帝王カエサルは自ら母の腹を破りてこの世に誕生した。帝王の帝王たるゆえんである！

看護婦1 院長先生。(ト、メスをさしだし)はやく切開を。

看護婦1・2 はやくセンカイツ！

院長 まかせてチャブダイ。！

院長、片手にメスを握ると思ひ切り産婦の腹につき立てる。

血の雨が降り、舞台を真紅に染め上げる。

看護婦1 まあ、なんてあきれた！

看護婦1・2 血の嵐！

赤児の泣き声がかきこえる。

院長、裂けた腹からドロドロの塊をとり上げる。

院長のタナゴコロで、宙をつかむように必死に手足をバタつかせる小さな赤い肉の塊。

院長 無念。帝王ならず。オナゴじゃ。これはオナゴじゃ。

Scene 2 ぐめんなきい

再び仕事机の前のヤスベー。

遠くはるかを見つめたままのヤスベー、おもむろに語り出す。

カスミの姿はない。

ヤスベー (独白) そのとき、街から明かりが消えました。近づきつつある台風が頭の上の電線や木々の梢をゴウと鳴らして、チャブ台のローソクは風前の灯です。母はカンバリました。三日三晩いきみつづけて、でも結局、最後は科学の力をかりねばなりませんでした。帝王切開。独裁者カエサルにちなんでこの名がある……というのは俗説にすぎません。しかし、父はたしかに男の児が欲しかったのにちがいないのです。

舞台奥にベッドが浮かび上がる。

ベッドに横たわる産婦とそれを傍で見守る男。……ヤスベーの父と母である。父の背中に隠れるように小つちやいヤスベー。

父 (母に) なアに、こんだ男さ。昔つから一姫二太郎つてーくらいでね、だれがなんてつたつて男つたら男。ハハハ……。

そこへ、産着にくるんだ赤児を抱いた院長やって来て、無言で赤児の股を開き、父に示す。一瞬、父の表情が凍りついて……。

ヤスベー (独白) ナガヨ和正。ボクの父です。地球物理の若き研究者でしたが、母との結婚を反対され、逃げるようにこの街へやって来てからは、彼の研究は地球ではなく母に向けられました。しかし、あの日、小さな赤い肉の塊とひきかえに、父はその研究対象を失うこととなります。

院長、赤児をヨキコの脇に寝かせると去った。

母 (ポツリと) ごめんなさい。

和正 ……えっ？

母 ……

父 (ベッドの傍へ行き) なんだい、ヨキコ。なんかいったのかい。

母 もういいんです。

父 (ムツとして) いつもそうなんだ。いいたいことがあったらいいじゃないか。

思わずヤスベー、二十五年前の母にかわって父に応え。

ヤスベー ごめんなさい。

父 (彼方から声がきこえたような気がして) え？

ヤスベー そういったのよ。

母 ごめんなさいって。

父 (ジッと母を見つめ) ……バヤリース、買ってこようか。

ト、行きかける。

母 和正

父 もういいんだよ。

母 カスミ。

父 え？

母 カスミっていうのはどうかしら。この子の名前。

父 ちよつとつかみどころがないんじゃないか。それよりケンイチってのはどうだい。そりゃ女の子にケンイチなんてとかさ、くだらないことにこだわる奴もいるかもしれないけど、いいじゃないか、幸せならば。ハハハ……。

母 ……。

父 そ、そうだね。カスミもいいね。

母 花の色は内にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風。……

母、イビキをかいて眠り出す。

父 (母の異変に気づいて) オイ。どうしたんだ。オイッ。……… (室外へ) 先生。先生ッ！

ヤスベー (独白) 三十二歳の母は眠るように静かに息をひきとりました。そしていま、ボクも母と同じ三十二歳です。

死者の国への水先案内のごとく、夜の子供バンド現われて、死の調べを奏でつつベッドを巡る。

Scene 3 地球を廻せ、お父さん

ヤスベー、なおも仕事机に向かって呆然とモノ思い。かくも長きモノ思いは、実はすべて新連載予定のマンガのためだった。

というわけで、ひきつづき二十五年前に思いをはせるヤスベーの心のスクリーンに映し出されたかのように、舞台奥では母の通夜の準備が進められていた。

ベッドに横たわる母の屍。その脇に正座する赤児のカスミをおぶった父と小つちやいヤスベー。事務的に動き回る葬儀社の社員1・2。

そのとき、ヤスベーの仕事部屋に訪問者が……。

ナンバ こんにちは。ラビット書房のナンバです。

上手からいかにも編集者然とした編集者のナンバ、コート姿で汗を拭き拭き登場。

ナンバ イヤー、蒸すですね。また台風近づいてるですって？ ……ところで先生、今日がなんの日か知ってるですか。

ヤスベール (あわてて机に向かい鉛筆を動かしつつ) わかってるよ。

ナンバ ほんとですか。

ヤスベール いままで忘れたこと、あったかい。

ナンバ ボクでさえ忘れてたのに…

ヤスベール え？

ナンバ 誕生日。

ヤスベール だれの？

ナンバ ウチのおふくろの。

ヤスベール 知るわけないだろ。

ナンバ ボクが締切ってゆーと思ったですね。

ヤスベール (立ち上がり) 紅茶いれようか。

ナンバ ボクやるですよ。

ヤスベール キミにいられてやりたいんだよ。

ナンバ でもボク、嫌いですから。

ヤスベール 紅茶、嫌いだっけ？… (ト、再び机に向かう)

ナンバ (まわりつくように) 先生。カスミさん、寝てるですか。

ヤスベール ナンバ君、邪魔だよ。

ナンバ ボク、お邪魔ですか？… (ト、スゴスゴ上手へ去るそぶり、おもむろにコートを脱ぎすけると) 先生、ボク、パジャマです。

ト、コートの下のパジャマ姿でポーズ。

ナンバ パジャマでお邪魔 (ト、言いかけて、ヤスベールの冷たい視線と出会い) ……しました。

ト、再びスゴスゴ去らんとする。

ヤスベール ナンバ君。

ナンバ (待ってましたとヤスベールに駆け寄り) 原稿ください。

ヤスベール 母がね、死んだんだよ。

ナンバ エエツ？

ヤスベール それでね、今、弔電打とうとしてたところなんだ。

ナンバ いつなくなつたです？

ヤスベール 二十五年前の台風の夜。

などいいながら、机に向かい鉛筆を走らせる。

ナンバ 二十五年前？… (ケゲンそうに机をのぞきこんで) アアッ！先生ツ。これ、もしかしてウチの原稿！まだコンテ!? アアッ、全然できてないじゃないすか。

ヤスベール (きこえぬふりで鉛筆を走らせ) ……そうだ。電報配達を出そう。学生アルバイトがいいな。

(などブツブツいつて) ……「ナガヨさん。電報ですよ。電報。」…

下手奥から二十五年前の学生アルバイトの電報配達が登場。

電報配達 ナガヨさん、電報ですよ。電報。

二十五年前の父、立ち上がり……。

父　　どうも。ごくろうさまです。（ト、電報を受け取り、宛名を呼んで）「ナガヨ・ヤスベール先生」。
ヤスベールに!?

小つちやいヤスベール、駆け寄り、父の手から電報を奪って、去る。

父　　コラ、ヤスベール。かえしなさい。（ト、後を追わんとす）

電報配達　電報料金お願いします。

父　　（驚いてふり向き）わたしが払うんですか！

電報配達　未来から届けたんですから。（ト、手帳を調べ）二十五年で二十五円になります。

父　　二、二十五円って……そ、そんな大金あったらわたしだつてね、家の一軒くらい建ててるよ。

机に向かうヤスベールにナンバが脇から口をはさむ。

ト同時に、舞台奥の二十五年前が一瞬凍りつく。

ナンバ　先生先生。家一軒って、いくら二十五年前つたつてソースセンベが一枚二円、ジャム付きコッ
ペが十五円の頃ですよ。

ヤスベール　父はね、生まれてすぐ中耳炎にかかつてね、失くしてしまったんだ、金銭感覚を。

再び二十五年前が融解する。

電報配達　二十五円払うのか払わないのか。

父　　そこをなんとかひとつ、まからないもんでしょうか。

電報配達　学生アルバイトだからってボクのことバカにしてるな。

父　　（財布をほたいてお札を出し）お願いします。二十五円なんていわずに二万円にまけてやってく
ださい。これでわが家の全財産なんです。

電報配達　（ひったくるように札を握り、ポロポロうれし泣きして）ウウ……（ト、去りかけて）学生
アルバイトだからってバカにするなよッ。

ト、理不尽な怒りをぶつけると、唐突に訪れたシアワセを握りしめ、ルンルンして去る。

父　　（感動して）話のわかる人でよかつたなア。

そこへ突然、どこからともなくカラオケ（の前奏）が流れ込む。

ベッドの母の屍の傍に添い寝するように寝ていた男がいて、母の小指を口にくわえたまま前奏
にのってムックリと起き上がり、「小指の思い出」を歌い出す。田手上葬儀社社主の田手上ハ
ジメである。

田手上　♪あなたが嘸んだ　小指が痛い　きのうの夜の

いきなり母の屍が起き上がり、あまりの小指の痛さに思わず……

母（の屍）　小指が痛い！（ト、言って、ハッとして屍としての自己に目覚め）わたしは遺体。

ト、再びベッドに横たわる。

田手上、ニヤニヤと父に近寄り……。

田手上 (学生アルバイトに対する気前のよさを) 見せてもらいましたよ。

父 イヤイヤ、これはとんだところを。それより田手上さん、さっきの件なんですけど……。

田手上 ハイハイ。みなさまのご家庭にあつてはならない田手上葬儀社。世の中になくってはならない田手上葬儀社。お電話ひとつ、近代設備の田手上葬儀社……といたしましては(ソロバンとり出し、はじいて)このくらいの線でいかがかと。

父 イヤイヤ。そこんとこひとつ、これで……チャ。(ト、脇からご破算にする)

田手上 その、それじゃウチが破産だよ。

父 ええ、ですからひとつ、ご破算に願ひまして……。

田手上 (再びソロバンはじき) ぎりぎりゆずつてこれでいっばい。

父 だから、そこんとこひとつ、これで……チャ。

ト、めげずにご破算にする父。

二人、目が合い爆笑。

田手上 (急にムスツとして社員1・2に) オイ、棺桶もつて帰るぞ。

父 田手上さん。そんなこといわずに……。

ト、田手上にすがりつく。

社員1・2、おかまいなしに葬具をかたづけ、去る。

ヤスベ、筆を止め、思わず大声で……。

ヤスベ、がんばれッ、お父さん!

ト、同時に、二十五年前の父と田手上、凍りつく。

ナンバ (あわてて) シーッ。先生。カスミさん、起きちゃいますよ。

ヤスベ、こんな声ぐらいで目をさましやしないよ。

寝間着姿のカスミ、ティーカップをのせたトレイを持ち、二人の背後に影薄く立っていた。

カスミ あたしなら起きてたのよ。

ナンバ (ギョツとして) カスミさん!?

ヤスベ、だれが紅茶なんか頼んだんだい。

カスミ だってナンバさん、あたしの紅茶が好きなの、ね。

ナンバ ハイ。

ヤスベ、キミ、紅茶は嫌いだって……。

ナンバ ハイ。あれは先生の紅茶。

カスミ ヤスベはお仕事をしてればいいの。

ヤスベ、だから出てつてくれよ。

カスミ あたし邪魔?

ナンバ ボク、パジャマ。(ト、カスミに) カスミさんに合わせてコーディネートしたです。

カスミ (ナンバのパジャマを見て) でも、ヤスベはあまりこの色、好きじゃないわね。ナンバ あ

なたはどうです。

カスミ (空々しく) え? なんのこと?

ナンバ (バツ悪く) ア、紅茶冷めるですよ。(ト、カスミにカップをさし出す)

ヤスベ、キミはボクの原稿よりカスミの紅茶の方が大切なんだね。

ナンバ (元氣よく) ハイ。

ヤスベ、ズル。

カスミ ヤスベ。あたし、ナンバさんに天体望遠鏡見ていただくかな。

ナンバ (さらに元氣よく) ハイ。

ヤスベ― 台風でなにも見えるもんか。

カスミ そんなのダメ！ 今夜は皆既月蝕よ。あたし、待ってたんだから。昼も夜も。ベッドで待って
たんだから。

ナンバ カスミさん。ボク、月蝕大好きです。

ト、先に立って下手へ去らんとす。

その後に従おうとしたカスミの耳に二十五年前の父の声がまぎれこむ。

父 待て！ 行くんじゃない。

立ち止まり、あたりを見回すカスミ。

ナンバ じゃ先生、原稿の方よろしく。

ト、ルンルンして去る。

父 わたしのいうことをきけッ。

カスミ ヤスベ―。いまなにかいった？

ヤスベ― (ゆっくりと机から顔を上げ) ボクじゃないよ。和正だよ。

カスミ、おびえたようにヤスベ―を見つめ、下手へ去る。

ヤスベ― (父の声音で) わたしのいうことをきけッ。

ト同時に、二十五年前の父と田手上、融解する。

父 田手上さん。きいてくれ。わたしは金がない。わたしはヤンボーマンボー天気予報じゃないぞ。

わたしはピンボーなんだ。

田手上 あんただけじゃない。わたしだって最近もの忘れがはげしくって……。

父 それはケンボー症だ。

田手上 こりゃまた失礼。

ト、去る。

父 田手上さん。頼むから棺桶だけは置いていってくれ。

ガックリとその場にうずくまる父。

ヤスベ― 和正。……和正。

父 (ふと顔を上げ、あたりを見回し) ……。

ヤスベ― ボクだよ、和正。

父 !? ……ヤスベ―か。どこにいるんだ。

ヤスベ― ホラ、ここだよ。

父 どこだ、ヤスベ―。

ヤスベ― ここだよ、和正。

二十五年の時の隔りをはさんで父と娘が向かい合う。

父 ヤスベ―!? ……ほんとにヤスベ―なのか。

ヤスベール そうだよ、和正。

父 いくつになった？

ヤスベール 三十二。

父 そうか。ヨキコと同じか。……なにしてるんだ、

ヤスベール マンガ、描いてる。

父 マンガはもうかるか？

ヤスベール このごろあまり描けなくて……。

父 おまえまた独身か？

ヤスベール (うなずいて) ……。

父 カスミは？

ヤスベール 一緒にいる。、

父 あいつも独身か？

ヤスベール 体がね、よくなって……。

父 そうか。

ヤスベール ねえ、和正。

父 なんだい、ヤスベール。

ヤスベール お父さんて呼んでもいいかな。

父 どうして。

ヤスベール ほんとはずっとそう呼びたかったんだ。

父 ……。

ヤスベール 怒ったのかい。

父 いえばよかったのに。

ヤスベール でも、新しい家が……。

父 ヨキコは死んでしまった。

ヤスベール (父の口調で) ヤスベール。ごらん。ここがわたしたちの新しい家だ。ここではお母さんも、お父さんも、おまえも、みんな同じただのヒトだ。お母さんはただのヨキコ、お父さんはただの和正、そしておまえは……。

父 ヤスベール。わたしなら呼びたいように呼べばいい。

ヤスベール ボクはヤスベールじゃないよ。ただのヤスミだ。

父 わかってるさ。

ヤスベール ねえ、やり直そう。もう1度はじめからやってみるんだ。

父 なにをだ。

ヤスベール 全部さ。

父 どうやって。

ヤスベール 地球を逆まわりさせて。全部元に戻して。

父 そんな、スーパーマンじゃないんだから。

ヤスベール でもボク、呪文を知ってるよ。

父 呪文？

ヤスベール よい子の願いはなんでもかなう秘密の呪文さ。やろうよ。地球を廻せ、お父さん。

ヤスベール、精神統一。

父、床に両手をつき足踏みで地球を廻してる気分。

父 どうだい、廻ってるかい、ヤスベール。

ヤスベール (呪文を) マラカブルー、メチカブルー、ビビディバビディ高木ブルー！お父さん！地球を廻せッ。

父、いきなりナニモノかに憑かれたように立ち上がると!?

父 ウー！リヤー！タアーツ!!

ト、気合を入れるや大地鳴動、すべてが逆まわりを始める。
ヤスベー、はじきとばされるように机につぶして気を失う。
下手奥から電報配達、逆まわりで登場。

突然の静寂。

電報配達、父からひったくった二万円の札を手に、忠実に物語を再現してポロポロと泣き出す。

郵便配達 ウウ……（ト、去りかけて）学生アルバイトだからってバカにするなよ！

ト、ルンルンして去る。

父 （感動して）話のわかる人でよかつたなア。

そこへ突然、どこからともなくカラオケ（の前奏）が流れ込み、ベッドの母の屍の傍に添い寝するように寝ていた田手上、母の小指を口にくわえたままムツクリと起き上がり、「小指の思出」を歌い出す。

田手上 ♪あなたが嘸んだ 小指が痛い きのうの夜の……

いきなり母の屍が起き上がり、あまりの小指の痛さに思わず！

母（の屍） 小指が痛い。！（ト、言って、ハツとして屍としての自己に目覚め）わたしは遺体。

ト、再びベッドに横たわる。

田手上、ニヤニヤと父に近寄り。

田手上 見せてもらいましたよ。

父 イヤイヤ。これはとんだところを。それより田手上さん、さっきの件なんですけど……。

田手上 イヤイヤ。みなさまのご家庭にあつてはならない田手上葬儀社。世の中になくはならない田手上葬儀社。お電話ひとつ、近代設備の田手上葬儀社——いたしました（ソロバンとり出し、はじいて）このくらいの線でいかがかと。

父 イヤイヤ。そこんとこひとつ、これで……チャ。（ト、ご破算にして、首をかしげ）ムムこれと同じことが前にもあつたような……。

二人、目が合い爆笑。

田手上 （急にムスツとして社員1・2に）オイ、棺桶もつて帰るぞ。

父 タ、田手上さん。そんなこといわずに……。

社員1・2、葬具をかたづけ、去る。

父 地球を廻すぞツ。

田手上 （一瞬ひるんで）な、なにツ。

父 （自分で自分のいっただことにドギマギして）え？ わたし、いまなにかいいました？だ、だからつまり、エー、わたしはですね、地球をかじったことがあるんですよ。

田手上 （畏敬のまなざしで）「クイズ地球まるかじり」に出演したの？

父 い、いや、かじつたのはその、地球物理でして。

田手上 いいまちがえるな。

父 まちがいはだれにもある。そして、地球にはヘソがあるんだ。（ト、いかにも重々しく）かつて地球物理の若き研究者であつたわたしはだ、世界各地の重力探査データをもれなく集め、カズマ

「サ理論による精密な残留重力分布図をつくった結果だ、なんと、この地球上にはたった1カ所、まるで台風に目があるように、あらゆる地上の力をすべてご破算にする真白な穴があることを発見したんだ。それが地球のヘソというワケだ。等価原理に基づくわたしのカズマーサ理論が正しければだ、そこでは、このわたしも、この地球も、みいんな同じたのモノだ。そこでは、わたしはただの指先一本で、この地球をさかさまに廻すことだつてできちゃうんだぞ。どうだまいったか。まいったついでにここはひとつご破算で（ト、田手上のソロバンを）チャ。」

ト、ご破算にする。

田手上 チャッチャッつて、わたしは加藤チャカ。

父 （念じて）ビビディバビディ高木ブー！

田手上 なにを言う！

父 （気合をこめて）ウー―リヤー―

田手上 よ、よせッ！

あわやの瞬間、ビュ。とばかりに空を切り裂き、飛んできた白球が父に命中。

父 だ、だれたア？

ト、その場にのびる父。

上手奥から、口笛吹きつつ、大きな野球帽を頭からスッポリかぶった半ズボンの少年登場。田手上のコセガレユズルだ。

下手奥から社員1・2、棺桶を運んでやってきて……。

社員1・2 ユズル坊っちゃまッ！

田手上 ユズル。お父さんを助けにきてくれたのかい。

ユズル （首を振って）……。

田手上 ちがう？（ト、耳を近づけ）なに？ お母さんが夕御飯のおかずは冷奴でいいですかつて？
行こうユズル、行つてお母さんにいつてやろう。お父さんは冷奴が大嫌いだと。

田手上、棺桶に横たわる。社員1・2、そのまま棺桶を運んで上手奥に退場。あとに従おうとしたユズルの前に小っちゃいヤスベーが立ちふさがった。しばし見合わず顔と顔。
ユズル、小っちゃいヤスベーに何事か耳打ちすると、脱兎のごとく走り去る。
机のヤスベー、ツツと顔を上げ……。

ヤスベー メメント・モリ。ボクにはたしかに彼のコトバがそうきこえたんだ。……メメント・モリ。死のしるし。

そのとき、袖から絹を裂くカスミの悲鳴。

ヤスベー カスミッ!?

思わず椅子をかけたヤスベー。

そこへカスミ、枕かかえて駆けてきて、ヤスベーにむしゃぶりついて泣く。

ヤスベー 一体どうしたんだ。

カスミ 人さらいッ。

ヤスベー 人さらい!?

カスミ あたしの体にさわったの……ムリヤリ……臭い息で……さらいにきたの。

ヤスベ― カスミ。

カスミ どうしてあたしのそばにいてくれないの、ヤスベ―。火の見櫓よりお月様が高く登ったらあたしをひとりじゃないっていつてたのに。

ヤスベ― いるじゃないか、ボクはここに。

カスミ お仕事してたのね。どうせなんにも描けないくせに。机に向かったきり。描けないならやめちまえばいいのよ。

ヤスベ― ボクたちのことを描いてたんだよ。今度の連載はきつとうまくいくさ。

カスミ、ヤスベ―の胸に顔をうずめ、眠っていた。

夜の底から人さらいの笑い声が風にまかれて近く遠く……。

ヤスベ―、歌い出す。

ヤスベ― ♪影絵の町の人さらい 月夜の屋根で猫のよう

黒いマントをひるがえし ステッキひとふり ぼくを呼ぶ

夜の巷 ひびく靴音 絹を裂くよなむせび泣き

めぐるよ めぐる 天翔る月 影絵の町の人さらい

さみしい影の薄笑い 百万の子供をひきつれて

ブリキの楽隊ひめやかに 夜にまぎれて消えてゆく

(セリフ)……ねい、人さらい。こんな夜にキミはどっから来たんだい。

黒いマントをひるがえし、影絵の町の屋根に立つ人さらいのシルエットが浮かぶ。

あの夜の子供バンドに似た一群をしたがえた人さらい、顔にかぶった笑い仮面の奥からヤスベ―に答える。

人さらい 影絵の町の屋根から屋根へ、銀の笛を鳴らしてやって来たのさ。

ヤスベ― ボクたちをさらってど―する。子供のいないさみしい家にもらいつ子にでもだすのかい。

人さらい 昔から人さらいにさらわれた子供はサーカスへ売りとばされることになっているんだ。そ―

ゆ―もんさ、ヤスベ―。

ヤスベ― いいのかい。ボクたち、とび箱も縄とびもできないんだよ。……なんにも知らないんだね。

和正。

人さらい、ゆつくりと仮面を脱ぐと、その顔は父にソックリ。

人さらい(父) さあ、おやすみ。フトンに入って。目をとじるんだ。あの火の見櫓よりお月様が高く

なる前に。おやすみ、ヤスベ―。こわ―い人さらいのオジサンがやって来る前に。おやすみ。ヤスベ―。

人さらいの一群、消滅する。

ト、同時に頭に大きなコブをつくったナンバ、フラフラとやって来る。

ナンバ ……カスミさん。カスミさん。(ヤスベ―と目が合つて)み、見てたです。カスミさん、望遠

鏡で。ボクは自分の目で。でも見えるわけじゃないですよね、なんにも。だって台風近づいてるって。

もうそこまで台風。

ヤスベ― 今夜はもう帰ってくれないか。

ナンバ カスミさん、眠ってるみたいに、全然動かなくなつて。ずっと全然。望遠鏡のぞいたまま。なんにも見えるわけじゃないのに。……カスミさん、つて肩に手をかけたら、いきなり悲鳴あげて。望遠鏡ふり廻して。本当ですよ、ホラ、このコブ。(眠っているカスミに)カスミさん。……カスミさん。

ゆり起こそうとカスミに手を伸ばすナンバ。

ヤスベ― さわるなッ。

ナンバ (泣き出した気分) だってベッドに寝かせなきゃ。

ヤスベ― 知ってるだろ。病気なんだ。

ナンバ だからベッドに。……カスミさん。

ナンバ、強引にカスミを抱き起こそうとする。

そのトタン、カスミ、絹を裂く悲鳴とともに枕でナンバをメッタ打ち。

カスミ、ハッとしてヤスベ―に抱きすがり……。

カスミ ヤスベ―。この人、だれなの。

ヤスベ― ナンバ君だよ。ラビット書房の。原稿とりにきたんだ。

カスミ どーもはじめまして。ヤスベ―がお世話になります。

ナンバ (カスミのあまりのヨソヨソしさに) カスミさん、やっぱりボク、お邪魔だったですね。さよなら、あなたの甘すぎるスパイス・テイ。

ト、カスミの顔面に捨てゼリフを吐き、思いをふり切って去ろうとした。

カスミ ナンバさん。

ナンバ (ふり向き) ハイ。

カスミ あなた、口臭があるでしょ。

ナンバ (うれしそうに) ハイ。思い出してくれたですか、ボクのこと。

カスミ だってあなた、鼻が悪いでしょ。

ナンバ ハイ。

カスミ そのくせあなた、大学出てるわね。

ナンバ イヤー、ほんの茨城大ですよ。ハハハ……。

カスミ それからあなた……。

ナンバ それから？

カスミ、立ったままイビキをかいて眠っている。

ナンバ カスミさん……それからどーしたんです？

ト、カスミにふれようとするのをヤスベ―、おしとどめて……。

ヤスベ― ナンバ君。

ト、わきへおしやる。

ヤスベ― (カスミの顔をのぞみこみ) また発作だ。

ナンバ 発作？

ヤスベ― (腕時計を見て) 少しずつ周期が短くなっている。

ナンバ 一体なんなんですか、先生。

ヤスベ― ……あれはカスミが小学三年の夏。マンガを描くボクと机を並べて勉強にいそしむカスミは、窓から射しこむ淡い朝の光に向かっていきなり「朝だ！ 徹夜だ！」と叫んだきり、立ったままイビキをかきはじめたんだ。

ナンバ 阿佐田哲也？

ヤスベ― ナルコレプシーさ。突然の睡眠発作と幻覚が、まるで月の満干のように(次第に朗詠調になつて)よせてはかえし、かえしてはよせて……。

ナンバ 先生。あまりセリフをウタわないでください。

ヤスベ― もしかしたらカスミは、あの勉強ザンマイの机の前で、いまでも夢を見ているのかもしれない。よせてはかえすデジャビユとジャメビユ。過去はいつも新しく、未来は不思議に懐かしい。

突然カスミ、ユラリと後ろに倒れる。
あわててそれを受けとめ、横たえ、枕をするナンバ。

ヤスベ― (悲しくなつて) ……ちよいとネーちゃん。そんなところに寝てもうてからに。

ナンバ、自分のカバンから枕をとり出すとカスミに添い寝した。

ナンバ カスミさん。ボク、あなたを見えていますよ。ここでこうして。ね。あなたはボクのお月様。カスミさん。カスミさアーん。……カスミさアーん……。

ナルコレプシーでもないくせに、ナンバもイビキをかき始める。

ヤスベ― ナンバ君。……オイ。ナンバ君。……

ナンバをゆり起こそうとするヤスベ―の動きに重なつてベッドの母の屍をゆする小つちやいやスベ―。ベッドサイドの父、小つちやいやスベ―に語りかける。(それに応えるべき小つちやいやスベ―のセリフは、机の前のヤスベ―が代弁します)

父 ヤスベ―。……コラ、ヤスベ―。それはヨキコじゃないんだ。ヨキコにソックリなお人形さんだよ。

(小つちやいや) ヤスベ― ヨキコはどこへ行つたんや。

父 遠い遠い海の向こうの母の国さ。

(小つちやいや) ヤスベ― それはどこやなの。ねえ、ヨキコはどこ行つたんや？

父 だ、だからさ、おまえ、ホラ、オムスビ好きだろ。でもお行儀悪いから、いつもオムスビおつことすじゃないか。そうすると、オムスビころりんッてころがつちやうだろ。ヨキコはやさしいから、おまえのためにオムスビのあと追っかけて行つちまつたんだ。

(小つちやいや) ヤスベ― ちつともわからへんわ。

父 バカ。わたしだつてわからないんだ。それでもなんでも、オムスビというのはころがるもんだ。オムスビころりんすつとんとん々々。そのうち小さな穴にすつぽんぽんだ。ヨキコはな、その穴くぐつて海の向こうの遠い国へ行つちまつたんだよ。

(小つちやいや心) ヤスベ― ウチも行きたいナア。

父 そのうちきつとおまえも行けるさ。

(小つちやいや) ヤスベ― イヤヤ々々。いまずぐ行きたいんや。

父の背で赤児のカスミが泣きだす。

父 行けるもんならな、わたしだつていまずぐ行きたいよ。

小つちやいやスベ―、下手奥に駆け去る。

ヤスベ―、遠くを眺めて語り出す。

ヤスベ― 父の顔は四十キ口をようやく越えたマラソンランナーのように見えました。父は決して努力家といわれる人間ではありません。でもその癖、彼はいくつかの努力をしました。すべてをもう一度やり直すために、地球をさかさまに廻そうときえしました。事実彼は地球を廻したのです。たとえそれがたった三分間のやり直しであったとしても、たとえそれがカップラーメンの麺のほぐれるほどの小さな奇跡であったとしても、父は努力したのです。そしてその日、父はもうひとつの小さな奇跡をボクの家にもたらすことになります。

小つちやいヤスベ―、何かを決意したかのように風呂敷包みを背負い、手には看板（マンガの吹出し）を持ってきて、それを父に見せる。

父 （吹出しの文字を読んで）「和正。行こうや、その母の国へ。いますぐ、お兄ちゃんと一緒に」
父 兄ちゃんじゃない。これはおまえの妹だよ。

小つちやいヤスベ―、吹出しをひっくりかえすと、別の文字。父、それを読んで……。

父 「こんな子いらへん。ウチ、お兄ちゃんが欲しいんや」？ お前にはお兄ちゃんはいないんだ。
ちやいヤスベ―、ダダをこねて吹出しで父をたたく。

父 ヤスベ―ッ。

火がついたように再び泣き出した赤児のカスミをあやしながら父は去る。

小つちやいヤスベ―、シヨンボリと後ろ向きに座ると、背中の風呂敷包みから別の吹出しをとり出し、肩ごしに客席に掲げる。そこには「ウチ、お兄ちゃんが欲しいわ」と書いてある。

ヤスベ― （呪文を）マラカブーラ、メチカブーラ、ビビディバビディ高木ブー！

父、うってかわった明るい顔で入ってくる。

父 ヤスベ―。紹介するぞ。おまえのお兄ちゃんだ。

いさぎよくスポットライトを浴び、学生服姿の少年、踊りながら登場。

ヒルマ ヤスベ―君。元気ですか。ボクは科学と探検とマンガ好きの少年ヒルマです。夜中に逢ってもまっヒルマ。歩く姿はアメリリス。（ト、ポーズ）どうだい。きまっただかい。ヤスベ―君。学力抜群、ヒルマ君。スポーツ万能。趣味冷奴。キミもお食べよ。ホラ、ヤッコだす。

ト、ヤッコをさし出す。

父 ヤスベ―。これだけはいっておくぞ。ヨキコは遠い国へ行ってしまった。今日からはわたしと、おまえと、カスミと、そしてヒルマと、みんなで力を合わせて新しい家をつくるんだ。……でもな
ヤスベ―、もしおまえがそう呼びたいのなら、たまにはお父さんと呼んでもいいんだぞ。

ヒルマ 和正。いいことゆーねえ。
父 ハハハ々々……。

ヒルマ、ポケットから札束をとり出す。

父 オオッー!?

ヒルマ さあ、これでヨキコの葬式、パッとやろうよ、パッと。
全員、この上なく明るい高笑い。

父 （札束受け取り、そこに書かれた文字を読んで）こども銀行？

わけもない大笑い。

父 うれしいなア。あんまりうれしいから地球廻しちゃうかな。

ヒルマ どーやんの。やってよ、ケチ。

父 (ついのせられて) ビビディバビディ高木ブー。ーなんちゃって。

腹の皮をよじって笑いながら父、「ウー！」とか「リヤー！」とかいつておどけるうち、ヒルマにそそのかされ、「ダメ々々。これをいったらホントに廻っちゃうんだから」などといいながらも、ついにキメの文句「クアー！」まで口にしてしまった。
一瞬、凍りついたような沈黙。

ヤスベアー 努力家でないかわりに父は大のお調子者です。

いきなり地球が逆廻りをはじめ。

めまぐるしく動揺する世界のなかで父と小つちやいヤスベアー、はじきとばされ、消える。ベツドにしがみつき必死に逆転に抗してがんばるヒルマ、異次元のヤスベアーに呼びかける。

ヒルマ ……ヤスベアーくん。…ヤスベアーくん…

ヤスベアー、夢中でペンを走らせている。

ヒルマ ヤスベアーッ!! キミだッ。マンガと天体観測と空想好きの…ヤスベアーッ!!

ヤスベアー、ハッと顔を上げペンを止める。

ピタリと逆転を中止する地球。

ズッコケて倒れこむヒルマ。

ヤスベアー ……アリ? ナンバ君。ボクのこと呼んだかい。……気のせいか。

ト、再びペンを握る。

ヒルマ (あわてて) やめろオツ!

ヤスベアー (手を止め) え?

ヒルマ ヤスベアー君。ボクだよ。二十五年前のヒルマだよ。キミに初めて逢ったあの日のヒルマだよ。

ヤスベアー ヒルマ!

ヒルマ 話したきことのみ多かりきたヤスベアー君。

ヤスベアー いいからキミ、語れやも。

ヒルマ その一、マンガについて。

ヤスベアー オホン。ボクはプロだぜ。

ヒルマ キミのマンガだが、あれはダメだ。

ヤスベアー アリ?

ヒルマ キミのまんがときたらどれを読んでもみな同じワンパターンのくりかえし。主人公にとって大切な人物がだれかの身がわりに死ぬところから必ず始まるキミのマンガでは、通俗的なノスタルジアには不自由しないかわりに、かんじんのストーリーはまったく陳腐でー!

ヤスベアー ヒルマ。キミの声、どんどん遠くなる。

ヒルマ (ポケットからアンテナのついた石をとり出し、その石に向かって) これでどうだい。

ヤスベアー ウン。前よりいいぞ。

ヒルマ ヤスベアー君。ヤスベアー君。きこえますか。ボクはいま、この鉱石ラジオから遠くはるかなキミに呼びかけている。感度はどうですか。ドーゾ。

ヤスベアー キミのコトバ、あまりききとれません、ドーゾ。

ヒルマ よくそういわれます、ドーゾ。

ヤスベアー ふだんの発声訓練が足りませんね、ドーゾ。

ヒルマ 面目ありません、ドーゾ。

ヤスベ― わかればよろしい、ドーゾ。

ヒルマ 校庭のかたすみでひとりぼっち、薪を背負うのは、ドーゾ。

ヤスベ― 二宮金次郎のドーゾ！

ヒルマ ヤスベ―君。今度は一体どこからやり直す気だい。

ヤスベ― え？

ヒルマ ボクたちを先へ行かせてくれないか。

ヤスベ― 先ってなんのことだい。

ヒルマ 明るい明るいミキ。

ヤスベ― ミキじゃなくて、それはミライって読むんだよ。

ヒルマ 明るい明るいー(ト、言おうとして)やっぱりクサくていえません。

ヤスベ― キミは未来を夢見る科学と探検とマンガ好きの少年ヒルマ。

ヒルマ ヤスベ―君。地球を廻せ。明るい明るいミキへ向けて。

ヤスベ― 和正に頼めよ。

ヒルマ このマンガの作者はキミじゃないか。

ヤスベ― でもボクは、自分のことをありのまま描いてるだけだよ。

ヒルマ ありのまま。本能のおもむくまま。

ヤスベ― そうとも。

ヒルマ 本能とは過去へ還ろうとする傾向のことである。だれかがいつていましたね。ドーゾ。

ヤスベ― 無機的本質への憧れ。ドーゾ。

ヒルマ かつて全天の星々はただの一個の原子だったのである。ドーゾ。

ヤスベ― 宇宙的ノスタルジアですね。ドーゾ。

返事がない。

ヤスベ― ヒルマー。ヒルマ。ヒルマ。三べん呼んでも返事がありません。ドーゾ。

どこからか声たちがー

声たち 三べん呼んでも返事がありません。ドーゾ。

ヤスベ― いまのはだれの声ですか。ドーゾ。

声の主は。舞台奥に勢揃いした登場人物たち(父、母、小っちゃいヤスベ―、田手上、夜の子供バンドその他いろいろ)だった。

登場人物たち いまのはだれの声ですか。ドーゾ。

ヤスベ― アア!? ヒトの真似っこしてますね。ドーゾ。

登場人物たち アア!? ヒトの真似っこしてますね。ドーゾ。

ヤスベ― そちら、やる気ですね。ドーゾ。

登場人物たち こちら、やる気ですよ。ドーゾ。

ヤスベ― ボクは負けないぞ。

登場人物たち ボクは負けないぞ。

「ボクは負けないぞ！」のシユプレヒコールが舞台のこちらとあちらでえんえんとくりかえされる。

ヤスベ― (疲れきって) ボクは……。

登場人物たち ボクは……。

ヤスベ― ボクはアッ!

母 ヤスベ―。……ヤスベ―。

ヤスベール、グッタリとくずおれる。

ヤスベール (顔を上げ) ヨキコ？

母 疲れましたか、ヤスベール。

ヤスベール 少し。ほんの少し。

母 わたしたちはたくさん疲れしました。同じことを繰り返すのに疲れてしまったわ。だってあなた
ときたら、二十五年前の夜を廻りつづけるメリーゴーラウンドにわたしたちを乗せたきり、いつま
でもおろしてくれないのだから。

ヤスベール だから今度の連載は……！

父 今度だけじゃないぞ、ヤスベール。

ヤスベール 和正だね。

父 全部そうさ。いままでおまえのマンガのなかでわたしが一体何べん地球を廻したと思うんだ。
田手上 いくらマンガだからつてもう許せんぞ。

ヒルマ ヤスベール君。許してくれたまえよ。

父・母 許してや、ヤスベール。

ヤスベール なにをするんだ。

ヒルマ 地球を廻すのさ。明るい明るいミキへ向けて。

登場人物たち マラカブーラ、メチカブーラ、ビビディバビディ高木ブーツ！

ヤスベール ワア……！

悲鳴とともにヤスベール、強引な力で彼方の世界へ引き寄せられる。

彼岸と此岸が接触し、舞台がめくるめく火花に包まれたと思つた次の瞬間には、ヤスベールと小
つちやいヤスベールのポジションがいれかわっていた。

登場人物たち、彼方の世界でヤスベールをとりおさえる。

ヒルマ (こなたの小つちやいヤスベールに) 地球を廻せ、ヤスベール！

登場人物たち 明るい明るいミキへ向けて！

小つちやいヤスベール、うなずくと机に駆け寄る。

母 ガンバルのよ、ヤスベール。

小つちやいヤスベール、机に向かおうとするが、あまりに小つちやくて背が届かない。

登場人物たち、どよめく。

登場人物たち ♪大きいことはいいことだアタタ……。

父 (トッサに歌い出し) ♪大きいことはいいことだ……ハイ！

小つちやいヤスベールの背がのび、「もう一人のヤスベール」へと変身。

もう一人のヤスベール、机に向かいペンを執る。

父 やったぞ。見事だ、ヤスベール。

カスミがムツクリ枕かかえて起き上がる。

ヤスベール カスミ。

カスミ ヤスベール？…… (机のもう一人のヤスベールに) またお仕事してたのね。

ヤスベール カスミ！ ボクはここだ。カスミイッ！

カスミ (虚空へ) え!?

登場人物たち 明るい明るいミキへ向けて！

もう一人のヤスベール ボクは地球を廻す。マラカブーラ、メチカブーラ、ビビデイバビデイ高木ブーッ！

もう一人のヤスベール、ペンを走らせる。

ヤスベール カスミイーッ！

ヤスベールの叫びの余韻をひきずったまま、彼方の世界で地球が廻り始める。
なおも遠くはるかを見やるカスミの上に……暗転。

scene 4 天体望遠鏡

溶明するとカスミ、舞台前面上手に置かれた天体望遠鏡で夜空を見上げていた。
もう一人のヤスベール、机に向かってペンを走らせていた。

カスミ (望遠鏡から目をはなし、夜空を見上げて) ヤスベール。お月様が空を昇ってく。
もう一人のヤスベール そら錯覚や。

カスミ でもあんなにはやく。グルグル廻って。

もう一人のヤスベール 雲が流れとるからそう見えるんや。

カスミ フーン。

もう一人のヤスベール あないにはやく月が巡ったら、ウチら、あつという間にトシとつてまうわ。

カスミ あたし、はやくトシとりたい。

もう一人のヤスベール なんやて。

カスミ おまえはヒトの倍眠ってるからヒトの半分しかトシとらないって、ヤスベール、いったじゃない。

もう一人のヤスベール 寝る子は育つゆゆのんは、あれはウソやで、カスミ。

カスミ ヤスベールばかりトシとつて、どんどんババアになって、ずるい。ヒキヨーよ。

もう一人のヤスベール ええやないか。

カスミ わたしもはやくババアになりたい。

もう一人のヤスベール カスミ。ヒトはな、夜眠るたびにあの世へ接近しとるのやで。

カスミ あの世？

もう一人のヤスベール 眠ってるあいだにウチら、モノゴツツイ速さであの世の入口に向かって近づいとるんや。朝になればたいはいはまたフトンに戻ってくるのやけど、本当はな、うまいこと戻れんと、そのままいつてまう奴もギョーサンおるゆーことや。眠るゆーのんはそない非常に危険なことなんや。つまり、ウチら毎晩、生きるか死ぬかの大冒険しとるわけや。

カスミ ヤスベール。

もう一人のヤスベール なんや。

カスミ あたしのこと、嫌いでしょ。

もう一人のヤスベール ……。

カスミ あたしも嫌いよ。多分。

もう一人のヤスベール さかさまなんや。

カスミ え？

もう一人のヤスベール 見とるんよ、おまえのこと。目閉じたおまえの顔見ながら、もう帰って来んような気がして。そんなとき、おまえはきつとモノゴツツイ速さでさかさまにいごいてるんやね。地上の重力とはさかさまに。あの世に向かつて。だからおまえの時間はウチより少ししか流れへん。ウソやない。アインシュタインがそーゆうたんや。

カスミ ヤスベール。あなた、いつから関西弁になったの。

もう一人のヤスベール し、しやから、『番頭はんと丁稚どん』観とつたらうつてもうた。カスミな

によ、それ。

もう一人のヤスベール おまえの生まれる前の話さ。

カスミ ヒトの知らない話はやめて。あたし、なんにも知らないんだから。『てなもんや三度笠』も『スチャラカ社員』も『トントンとんまの天狗さん』もなんにも知らないんだから。

もう一人のヤスベール 知つとるやないか。

カスミ とにかくその関西弁も、それから自分のことウチなんていうのも、いますぐやめて。……なんだかヤスベールじゃないみたい。

もう一人のヤスベール ……ボクはもうなにもいわない。それでいいだろ、カスミ。

もう一人のヤスベール、無言で再び机に向かう。

カスミ ねえ、ヤスベール。あたしね、なんだか今夜は全然眠たくないの。このままずっと眠らずにどんどんトシとつて、どんどんババアになって……。そしたらあたし、春の午後の陽だまりでヒザの上の仔猫と一緒にやり直すのよ。なんにもかも全部。本当にあつたことも、そうなればいいなアと思いつながらならずにしまったこと、そのときは思いもかけずにいたこと、やりそこねたこと……。

眠りつづけるナンバ、いきなりムツクリと起きるなり……。

ナンバ ウサギじゃダメですか。

カスミ え？

ナンバ 仔猫のかわりに春の陽だまりのヒザ小僧でウサギがモチをついてたら、タラ、タラッタラ。夕、ラッタラッタラッタラ……。なにいつてんだろ、ボク。おかしなセリフだ。さっぱり意味がわからない。なんかの伏線かな。

カスミ (記憶をたぐるように) ラビット書房のナンバさん。

ナンバ ハイ。

カスミ 起きてたの。

ナンバ ボク、本当に起きてるんでしょか。それともまだあなたと夢を見てるのか、なんとなく今夜はそんな見境のない気分なんです。

カスミ 台風のせいかしら。(ト、夜空を見上げ) ホラ、お月様が空を昇つてく。あんなにはやく。グルグル廻つて。

次第に近づく台風の予感。

カスミ、天体望遠鏡を再びのぞく。

その傍で不安な夜空を見上げるナンバ。

もう一人のヤスベール (ペンを走らせながら) その朝、父は自転車オートバイの荷台にボクをのせると、近代的のオートメーション工場へ向かいました。明け方までの雨と風がウソのように、町は久々の日光浴です。しかし、台風はまだそこにいました。秋もよいの空気を父の背中を感じながら見上げた空には、ポツカリとまアるい穴があいていて……。目です。町は台風の目に入ったのです。

セリフの間に、風を切りつつ、自転車オートバイが父娘をのせ舞台奥を横切った。
(もちろんこれはマンガです)

Scene 5 オートメーション工場

機械的なノイズとともに、舞台奥に近代的のオートメーション工場が出現する。

白衣の作業着にマスク姿の工員たち、ベルト・コンベアにのって流れてくる部品を組み立て、ロボットのロンちゃんを作っている。

父、ヤスベールの手をひいて登場。

父 ヤスベー。主任さんに会ったらおまえもちゃんとごアイサツするんだぞ。
ヤスベー なあ、どんな人や？

父 なんといても中央の大学出てらっしやるからな。おまえ、お嫁にもらってもらうか。
ヤスベー デヘヘ……。

父 ホラ、ちゃんとハナをかんで。

ト、ハンケチでハナをかんでやり、ついでにそれにツバをつけてヤスベーの両の目尻を拭いてやる父。

そこへ主任登場。

ヤスベーにはそれがなんともあの田手上に似て見える。

主任 どうも々々。すっかり待たせちゃって。

父 忙しいのにもどうも。

ヤスベー アリー 田手上や。なあ、和正、田手上やで。

父 バカ。こちらは主任の田中さんだ。

主任 ハイ。主任の田中ヤスオです。

ト、田中康夫似の顔をほころばせている。

父 ひどい台風だったですね。

主任 大丈夫でした、お宅？

父 イヤア、いつそつぶれちまえばいいんですよ、あんなボロ家。ハハハ……。

主任 ハハ……。

ヤスベー 新しい家はつぶれへんで。

父・主任 エ？……

ヤスベー やっぱり田手上や。

父 ヤスベー。

主任 新築したんですか、家？

父 と、とんでもない。

主任 ボクもまだ借家ですからね。

父 いまどき家一軒建てたら二十五円はかかるでしょうね。

主任 ハ？（ポケットから給料袋をとり出し）それじゃこれ、二十五日分で一万二千五百円。（ト、渡しながら皮肉めかして）家の五百軒も建てたらどうです。

父 （全然通じないで）ハッ。ありがとうございます。（落ち着きのないヤスベーに）コラ、ヤスベー。ジツとしてないか。

主任 お嬢ちゃん、十円あげようか。

父 ダ、ダメですよ、そんな大金。

ヤスベー ウチ、いらへんで。

主任 （ヤスベーに）マンガうまいんだってな。ホラ、鉛筆でも買いな。

ト、ヤスベーの掌に十円玉を握らせる。

父 鉛筆一万本も買って帰るか。ハハハ……。

主任 ハハハ……。

ト、二人大笑い。が、すぐになにもおかしいことのないのに気付き、笑い止む。

父 それで主任さん、あの件なんです。いえ、うちもこれの他にまだ二人いて、ですから本採用にしていたらひとつバリバリやってみようかと。なんとかお願いしますよ、主任さん。

主任 (傍で作業中の工員に) オオッとイトーちゃん、そのネジ気を付けてよ。

父 仕事もすっかり覚えたことですし。ひとつバリバリと。

主任 (独白めいて) オートメーションなんていって、これからは機械とヒトの勝負だなア。

父 お願いします。

主任 ま、とにかくリンジの口があいたらまたお願いすることにして。

父 (ガックリと) そうですか。

主任 じゃ、ボクは仕事がありますので。

父 よろしくお願いします。(思わず土下座して) このとおり、(主任の背中に悲鳴のように) 田中さま。

主任、上手へ去る。

ヤスベー ……和正、もうええで。田手上は行ってもうた。

父、起ち上がる。

父 (力なく) 田手上じやないっていったじゃないか。

ヤスベー はやく乗ろうや、自転車オートバイ。

父 和正はうまいか? 運転。

ヤスベー ウン。

父 よオし。

ト、ヤスベーの手を引き下手へ行かんとす。

そこへ上手から百貫デブの工場のおばさん、ヤカンを手に登場。

おばさん オーイ。ナガヨさん。カギおいてかなきゃ。

父 え!? このカキ、おいてくんですか。

おばさん とぼけちゃダメだよ。自転車オートバイのカギだよ、カギ。

父 ア!? そ、そうだ。カギおいてかなきゃ。自転車オートバイの。(ト、ポケットからカギを出し) ……ねえ、おばさん、あれ貸してもらえないかな。ちよつと運びたいもんがあつて。

おばさん イヤー、無理だよ、あんた。個人のモノじゃないんだから。

ト、ひつたくるようにカギを取ると、ユツサユツサ去る。
間。

父 ヤスベー。おまえ、先にバスで帰つてろ。

ヤスベー 和正は?

父 ちよつと寄つてくところがあるから。

ヤスベー パチンコしいなや。

父 それに、あとでもう一度主任さんをお願いしておこうと思うんだ。

ヤスベー お酒飲みなや。

父 ヤスベー。…おまえ、さつき主任さんにもらつた金、どーした。

ヤスベー あるで。

父 ちよつと貸してくれないか。きつとあとで返すから。

ヤスベー だってこれ、ウチがもううたんや。

父 だからきつとあとで…。

ヤスベー だって和正、ペコペコしてただけやないか。

父 バカッ!

ト、手をふり上げる。

その父の顔をかなしそうに見ているヤスベ―。
父、ふり上げた手をもどす。
ヤスベ―、十円玉を父に握らせる。

父 (掌の十円玉を見て少年のように) やった。ピカピカだ。マッサラだけ。今年かな。
ヤスベ― さっきウチが消しゴムで磨いたんや、和正。

父 (給料袋を渡し) ヤスベ―。これ、もって帰れ。もしわたしの帰りが遅くなっても、お米の場
所はわかっているな。おシヨ―油なかったらお隣から借りろ。それから……。

ヤスベ― 戻らへんの？
父 戻るさ。

ヤスベ― なにもかも元に戻るかな。

父 金、落とすなよ。

ヤスベ― わかっとるんか!? 十円じゃソースせんべ五枚でおわりやで。

父 ウン。わかっている。

ヤスベ― 和正。

父 なんだい、ヤスベ―。

ヤスベ― ウチら、和正がいなくなったってきつとうまくやっていくて。きつとうチら……。父 じゃあな、

ヤスベ―。

父、行かんとす。

父 (ふと後ろをふりかえって) なんかいったか。

ヤスベ― ……ごめんなさい。

父 え？

ヤスベ― 女の子でごめんなさい。

父 ヤスベ―

ヤスベ― (空を仰いで) ……目だ。台風の目だ

しばし二人、空を見上げたまま……。

ヤスベ―、ハッと気付くと父の姿はもうそこにはない。

机に向かうもう一人のヤスベ―、ペンを走らせながら……。

もう一人のヤスベ― ……父は戻りませんでした。台風があとかたもなく過ぎ去ったあとも、あの赤く
光る十円硬貨はボクのもとには戻らなかつたのです。つぶれかけた新しい家の下でボクは必死でこ
らえていました。父とちがつて、ボクは努力家なのですから。そして、季節はやがてたそがれの国
へと足を踏み入れ……。

たそがれのオートメーション工場に父の姿を探すヤスベ―、歌い出す。

♪ あの日空 あの日雲

あの日虹 あの日風

二度とかえらぬ やさしい呼び声

いまも忘れぬ あの日すべてが

ぼくを呼んでいる

(セリフ) ねえ、和正。ボク、もう自分のことウチなんていわないよ。ゼーッタイおかしな関
西弁なんかつかわないよ。だからさ……だからさ……。

他の工員たちにテキパキと指示を与えている一人の工員に気付いたヤスベ―、ハッとして歌い
止め……。

ヤスベール（工員に）和正!?

工員（ふりかえって）……。

ヤスベール 和正なんだろ。……やつと会えたね。元気そうじゃないか。ねえ和正。これからの時代は近代的のオートメーションとかいって、機械とヒトの勝負だぜ。いいかい。機械に負けるな、馬肥やせ。

工員、マスクをとるとヒルマだった。

ヒルマ ヤスベール君。

ヤスベール ヒルマ!?

ヒルマ 毎日たそがれになるとキミはそこに立っていたね。知っていながら知らない素振り。ごめんよ、ヤスベール君。

ヤスベール その格好は？

ヒルマ いまじゃこの工場の技術主任さ。

ヤスベール だってキミはまだ小学生じゃないか。

ヒルマ イヤー、頭を見こまれてね。ハハハ……。キミに心配かけまいと内緒にしたのは悪かつたけど、これもみな、新しい家の経済のためさ。

ヤスベール 和正はここにはいないんだね。

そのとき、ヤスベールの傍で組立て途中のロボットがおもむろにこちらをふり向き、ヤスベールに語りかける。その顔は父に似て……。

ロボット（父） ヤスベール。わたしならここにいるじゃないか。

ヤスベール 和正!?

ロボット（父） わたしは機械なんかにや負けないぞ。見てくれ、この鋼鉄の腕。十万馬力のこのパワー。わたしはいまでは機械の大の仲良しさ。ハハハハハ

ヒルマ ヤスベール君。夜明けは近いぞ。ロボット工学のもたらす明るい明るいミキの夜明けだ。

ヒルマとロボット（父）、肩たたきあつて大笑い。

ヤスベール（ポツリと）それはミキじゃない。ミライって読むんだよ。

耳をつんざく工場のノイズがすべてを消し去って――溶暗。

映像の変化とともに溶明すると、ノイズはヤスベールの部屋のドアのノック音になっている。

もう一人のヤスベール（ペンを休め）ハイ。どうぞ。

上手から一人の男、登場。

カスミとナンバも男を見た。

男 ナガヨさん、はこちらですね。（ト、部屋を見廻しヤスベールに）ウーム。あなたは？もう一人のヤスベール ナガヨ・ヤスミです。

男 ナガヨ・ヤスミ？……するともしかしてあなたの名前はナガヨ・ヤスミでは。もう一人のヤスベール ハイ。

男 やっぱりそうか。実はボクは弁護士のスリル亀吉といいます。こう見えても職業は弁護士です。もう一人のヤスベール ボクになんの用です？

スリル ナガヨ和正氏が昨夜死亡いたしました。

突然の知らせに驚く人々の顔。

暗転。

拍手にまじってきこえてくる演説調の声とともに溶明すると、そこは中学校の講堂。(といっても演壇がひとつあるだけだが……)

演壇の上でマイクに向かい顔面を紅潮させ、全校生徒に話している校長の刈賀先生。その脇に恥ずかしそうに立つヒルマ。

刈賀先生 ……皆さん！ 先生は今日どれくらい日を知りません。皆さんの級友でありますナガヨ・ヒルマ君は中学一年を三度落第いたしました。その結果、いまでは妹のヤスミさんと机を並べる今日この頃ではありますが、これは決して彼の頭脳の常より劣ることを意味するものではありません。すべての原因はひとえに彼の貧乏にあります。彼はいまを去る五年前、ナガヨさん家にもらわれちゃいました。ナガヨさん家は貧乏であります。では、なぜそんな貧乏な家にもらわれちゃったかといえ、ヒルマ君はもつともつと貧乏で、もつともつとさみしい子供だったからです。この世の不事は貧乏人によく集まると西洋のコトワザにもある、かどうかは知りませんが、ナガヨさん家にはお母さんがいません。あまつさえ、お父さんもヒルマ君をもらつちやうとすぐに人間蒸発しちゃいました。それから五年間、ヒルマ君は幼い妹二人を抱え、文字どおり寝食を惜しまぬ努力々の日々を送ってきたのであります。ちなみに、そんな彼の生活ぶりをふりかえれば、人のまだ起きやらぬ朝まだきの新聞配達から彼の一日は始まります。妹たちのために簡単な朝食をととのえるや、学校へ向かうヒルマ君は、その登校の道すがら自ら歩く広告塔としてサンドイッチマンを努め、学校におかれましては試験の出題予想屋、代返屋、昼休みの弁当売りなど、実にセコク銭もうけに励み、たそがれの街角での靴磨きを終えた後、妹たちのためにフルコースの夕食をととのえるや、天性のお色気売りモノに二丁目のオカマ・バーではナンバーワン・ホステスの地位を確立する一方、近代的のオートメーション工場で技術主任の重任を果たし、さらにそのかたわら、深夜の地下鉄工事にいそしんでおられました。

わきおこる感嘆のため息と拍手。

刈賀先生のセリフにあわせてヒルマ、一つ一つ商売道具を身につけ、その仕事ぶりを実演披露していたが、最後には道具にうもれ身動きとれなくなっていた。

そのとき、生徒のなかの一人が(客席で)手を上げた。あの葬儀屋のコセガレ田手上ユズルだ。ユズルは父の田手上ハジメにウリ二つである。

ユズル 先生。

刈賀先生 キミは葬儀屋のコセガレ田手上ユズル君じゃないか。

ユズル ひとつ質問してよろしいでしょうか。

刈賀先生 なんだね。

ユズル いまの先生のお話が事実だとすれば、ヒルマ君には眠る時間がありません。

講堂中にどよめきの波紋がひろがる。

刈賀先生 それは大変よいところに気付きました。ヒルマ君。葬儀屋のコセガレがあんなこといってますよ。

ヒルマ お答えします。実はボクは……単なる不眠症なんです。

水を打ったようにシーンと張りつめた空気が拍手へと爆発する。

ヒルマ、今朝もはよかア……などと歌いながら、地下鉄工用のツルハシをふるいつつ踊りながら去る。

あわててその後を追いかける刈賀先生。

一方、突然の訪問者を迎えたこちらヤスバーの部屋では、描きかけの原稿をながめていた亀吉

がいきなり笑い出す。

亀 吉 (笑い止んで) これは失礼。実はボクも不眠症なんです。つまり、一種の不眠症ですね。ところでナガヨさん。どーしてなんだ。どーしてあなたの家にはテレビがないんだ。

もう一人のヤスベー テレビ？

亀 吉 この町の目という目がテレビの画面と結ばれて、驚き、怒り、涙にくれたきのうの夜に、あなたは一体なにをしていたんだ。

もう一人のヤスベー 描いてましたよ、きのうもこうして机に向かって、マンガ描いてた。亀吉 シレ者めが。知れッ。この町の目という目のなかでただひとり、ナガヨ和正氏のいまわしい事故のニュースを知らないのはあなたただだけだ。

もう一人のヤスベー 事故って!?! なにがあつたんだい。

亀 吉 いまわしいとしかいいようがありません。事実、そのニュースを伝えたテレビ関係者も警察も政府首脳筋もその他いろいろも、口をそろえて「いまわしい」と述べる以外になんらなす術も情報ももたないのです。ナガヨさん、いやさ、ヤスベー。ボクの目にいまもユラメク和正氏の残像があなたには見えないのか。和正氏はテレビの画面からあなたに、ボクに、この町の目という目にあんなに呼びかけたというのに。

もう一人のヤスベー なんていつたんだい、和正は。

亀 吉 いまとなつては、いまわしいとしかいいようがありません。ただあのいまわしいいまわのきわのコトバだけはハッキリクッキリ覚えています。……「このテープは自動的に消滅する」。そういつたとたんでした。突然の落雷が町を襲って……。

もう一人のヤスベー (独白じみて遠くはるかに) そのとき、町から明かりが消えました。和正は真暗なテレビの画面のまん中で、針の穴のように小さな白い点になって、いつまでもこちらを見つめていました。

亀 吉 なんです？

もう一人のヤスベー テレビもね、もしかしたら針穴写真機みたいなもんじゃないか、なんてね、思ってたんだよ。

亀 吉 針穴写真機？

もう一人のヤスベー テレビのうしろに小さな針の穴があいていて、そこを通って届いた景色がさかさまに画面に映るんだ。だからテレビに写った人も車もビルディングも、本当は全部さかさまなんだ。逆立ちしてるんだよ。

亀 吉 ロマンティックな目付きはやめろ。……ヤスベー、いやさ、ナガヨさん。ボク亀吉はテレビを通じてナガヨ和正氏の遺言執行人に任命されました。つまり和正氏の遺産をその遺族にわたさねばならないのです。

もう一人のヤスベー 和正に遺産なんかあるもんか。

亀 吉 ことです。

ト、ポケットからピカピカと赤く光る十円玉をとり出す。

もう一人のヤスベー それは!?

亀 吉 二十五年前の十円玉です。

もう一人のヤスベー ピカピカじゃないか。

亀 吉 毎日消しゴムで磨いておられたのでしょうか。この硬貨と一緒に送られてきた手紙にも、キチョーメンな字で「趣味〓十円玉磨き」と書かれてありました。

もう一人のヤスベー その手紙を見せてください。

亀 吉 残念ながら、ウチの黒山羊さんが読まずに食べてしまつて。

もう一人のヤスベー どーして山羊なんか飼つてるんだ。

亀 吉 あなたがウサギを飼つてるようなもんですよ。

もう一人のヤスベー ウサギ？

ト、亀吉の示す方を見れば、天休望遠鏡のわきでナンバが大アクビ。そのまま横たわつてイビ

キをかきはじめる。たしかにウサギといわれればウサギのようでもある(?!)。

もう一人のヤスベ― あれはラビット書房のナンバ君だよ。

亀 吉 ボクにはウサギにしか見えませんが。こう見えてもウサギには負けたことがないんです。なんといつてもボクは亀吉ですから。ハハ々……。

ナンバ、いきなりムツクリ起き上がり!?

ナンバ 先生。いまボクのこと呼びました?

亀 吉 黙って眠っている、ウサギ。!

ナンバ (素直に) ハイ。

ト、いつて再び高イビキ。

亀 吉 ところで、和正氏のご遺族はあなた御一人で間違いありませんね。

もう一人のヤスベ― 兄と……それに妹が。

亀 吉 妹さん?

もう一人のヤスベ― カスミ。

ト、呼ぶが、カスミの姿はどこにもない。

亀 吉 (書類をとり出し) この戸籍謄本にはカスミなんて名前はどこにもない。

もう一人のヤスベ― エ!?

もう一人のヤスベ―、脱兎のごとく机へ駆け寄り、描きかけの原稿を握りしめて――。

もう一人のヤスベ― カスミが。……カスミが危ないッ!?

ト、必死の形相で原稿にペンを走らせ始める。

もう一人のヤスベ―の叫びをかき消すように拍手が舞い戻る。

二十年前の中学校の講堂では再び刈賀先生が演壇に上り、表彰状をひろげ、読んで――。

刈賀先生 オホン。「表彰状。ナガヨ・ヒルマ殿。貴殿は先般行われた運動会において百米徒競走の部に出場、七秒六の世界新記録で優勝されました。よってここにこれを賞します」――

天をゆるがす大拍手に迎えられヒルマ再登場、刈賀先生から表彰状を授与される。

刈賀先生 皆さん。しつこいようですが、先生の話はまだまだつづきます。といいますのも、ヒルマ君の栄誉はくめども尽きぬ底なし沼なのです。――オホン。発表します。ナガヨ・ヒルマ君はこのたび、貧乏人の息子でありながら、その趣味の冷奴の研究によって、ノーベル賞を受賞されました!?

銀河系にとどろく大拍手。「いいぞ、ヒルマ!」などの掛け声が混じる。

刈賀先生 ナガヨ・ヒルマ君こそは、わが町に輝く栄光の貧乏人であります!

拍手にうながされてヒルマがマイクの前に立つ。

ヒルマ 皆さん。どもアリガト。昔から天才の陰に悪妻あり、といわれませんか? そうです。ボクの今日の栄光あるのも、これひとえに、ボクの二人の妹たちのおかげであります。もしボクに十の拍手をくださるのなら、そのうち三つはヤスベ―に、そしてさらに三つはカスミに等しく向けてや

つてください。そうするとボクの取り分は四つになって一つ多いから余った一つはご破算に願って、泥の河にでも水に流してください。さあ、ご紹介します。ボクの二人の妹たち。ナガヨ・ヤスミ！

拍手に追いたてられるようにイヤイヤ登場したヤスベ、無理矢理刈賀先生の手で演壇に押し上げられる。

ヒルマ　そして本日の特別ゲスト。ナガヨ・カスミ。！

全身で拍手に応えながら小学三年のカスミ、ヤスベとはうってかわったステージなれした態度で登場。

カスミ　みんな、ホントに今日はあたしのために、こんなにたくさん、カスミ感謝しますー！ホントに
　　だうもありがとオ。

ヤスベ、思わず演壇をおり、逃げ出す。

ユズル、（客席から）駆け寄り、退場せんとするヤスベの手をつかむ。

ユズル　ヤスベ。あとで保健室で待つてるぜ。

ヤスベ　……メメント・モリ。

ユズル　そうさ。メメント・モリだ、ヤスベ。

ヤスベ、ユズルの手をふり払い去る。

カスミ　みんな。それじゃあたしがつくった唄、きいてくれる？ーワオ。輝け、われらが貧乏人！！

カスミ、ヒルマと共に歌い出す。

唄の間に彼方の世界の登場人物たち、踊りながら現われ演壇のまわりをパレードする。

♪わたしおうちがビンボーなの　いつもおやつはパンの耳

　父も母もないビンボー　遠足もプールも行けないの

　泣けてくる

※清く生きましようネ　ビンボー　これだよ

　正しく生きましようネ　ビンボー　まいったね

　美しく生きましようネ　ビンボー　きまつたね

　それがイチバン

わたしおうちがビンボーでも　素敵なお兄ちゃんがいるの

朝からトーフ屋のパートタイマー　ビンボーひまなしクリとナシ

　いかしてる

※リフレイン

曲が終わり登場人物たち、拍手しつつ消える。

カスミ、なおもステージから愛想ふりまき……！。

カスミ　だも、だもアリガト。

ようやく拍手が止む。

が、それでも一人拍手を止めない者がある。ユズルだ。

ユズル　カスミちゃん。聞かせていただきましたよ。

刈賀先生 さあ、諸君。そろそろ理科室へ向かう時刻ですよ。今日は待ちに待ったカエルの解剖です。

そのコトバをきいたトタン、なぜか壇上のヒルマ……。

ヒルマ やめろ。そんなのダメだ。カエルの解剖……カエルの解剖……。

ト、いったきり気絶する。思わず駆け寄る刈賀先生。

カスミ ダメ！ あたしのヒルマに触わないで。

ト、ヒルマをひとりじめにするカスミ。

刈賀先生 保健室だ。保健室へ運ぶんだッ!?

暗転。

Scene 7 メメント・モリ計画

深更のヤスベীর部屋。

必死に机に向かうもう一人のヤスベীর。

その傍で書類の束をめぐっている亀吉。

ウサギめいたナンバは相も変わらぬ高イビキ。

もう一人のヤスベীর (ペンを走らせながら) ……元に戻すんだ……カスミを戻さなくちゃ……全部元に……できるはずだ……カスミを……また間にあう……きつと……(ペンを持つ右手が次第に意志とは別に勝手な物語を描き始めて) アア……手が(ト、右手をおさえる) ……勝手にいごいて……(制止しようとする手をふり払って紙の上を走る右手) アアッ……やめろよ……それだけは……ダメだ……ダメだよ……(虚空に)絶対にダメだ!

さて、こちら舞台奥は放課後の保健室。

ベッドを囲んで幾人かの生徒たち、口々になにごとかつぶやきながらうごめいていた。夜の子供バンドに似ている。

生徒たち ……ソワカ……ソワカ……ソワカ……。

いきなり煙に包まれて田手上ユズルが姿を現わす。

ユズル (奇妙なポーズで) メメント・モリ!

生徒たち ソワカ!!

ユズル トリパノソーマノ!

生徒たち ソワカ!

ユズル ソンゲンシ!

生徒たち ソワカ!!

ユズル カレン・アン・クライン!

生徒たち ソワカ!!

ユズル 我らが「さかしまの帝国」!

生徒たち ソワカ!!

どうやらこれが集会におけるお決まりの儀礼のようだ。

ユズル 喜んでくれたまえ、諸君。遂にカエサルの命令がくだった。メメント・モリ計画決行の時が来たのだ。今宵、火の見櫓より月が高くのぼる頃、N地点に集結せよ！標的の暗号名はカスミだ！生徒たち 暗号名はカスミ！

ユズル 諸君。我らが闇の帝王。影の番長。カエサル様のお通りだい！

火花とともに湧きおこる煙がやがてベッドの上でヒトガタへと姿をととのえる。カエサル様の登場だ。

カエサル、顔にかぶった鉄腕アトムをよければ、な、な、なんと。ヤスベーではないか!?

生徒たち (トランス状態で) ソワカ！ ソワカ！カエサル！々々……。

カエサル (生徒たちを制し) 最終確認。

生徒たち (復唱して) 最終確認。

カエサル 我々は彼らとは別の生物である。

生徒たち ソワカ！

カエサル 我々はこれ以上彼らと共に暮らすことは不可能になった。

生徒たち ソワカ！

カエサル 彼らのルール、彼らのシステム、彼らの歴史からの逸脱を。

生徒たち 逸脱を！

カエサル 鉄とガラスとコンクリートが我々の母である。

生徒たち ソワカ！

カエサル エレクトロ・メカエカリスが我々の父である。

生徒たち ソワカ！

カエサル 我々はいまこそ「さかしまの帝国」の建設に立ち上がるのだ。

生徒たち ソワカ！

カエサル 合言葉は!?

生徒たち 合言葉は。

カエサル ……さよなら、ニジツセイキ。

生徒たち さよなら！ ニジツセイキッ！ ソワカ!!

生徒たちのシユプレヒコールが渦を巻く。

突然!?

ユズル だれだッ！

全員、ユズルの示す方を見る。

そこには一人の男子生徒が恐怖に立ちすくんでいた。

カエサル、鉄腕アトムの面をつけ、生徒たちの背後に隠れる。

ユズル 見ましたね。

男子生徒 (ブルブルとひきつつて首を振るだけで) ……。

ユズル 諸君。ヒトの話を盗み聴きする悪い子がどうなるか知っていますね。

生徒たち (恐怖におののきながら) ……。

ユズル さあ、おシオキだ、諸君。

生徒たち ソワカ！

生徒たち、必死で抵抗して叫びをあげる男子生徒を素裸にひんむくと、ベッドの上にしぼりつけ、口にタコを丸ごとおしこみ、尻の穴にはニンジンをぶちこみ、体中にトマトケチャップを塗りたくると、その上で冷奴をグチャグチャにつぶし、さらにそこに納豆を和えるや、ベッドのまわりをまわりながら踊り狂う。

男子生徒 (断末魔の) ワアッ!

ユズル よろしい。これで彼の記憶は抹消されました。……ソレ。

生徒たち、グッタリとして動けなくなった男子生徒をシートにくるむと運び去る。

ユズル (カエサルに) カエサル。ごらんのとおり、メメント・モリ計画の秘密は完璧に守られております。フフッ、フフフ……。だれだッ。

再び全員、ユズルの示す方を見ると、そこにはヒルマと、彼の背中ではふるえるカスミ。

ユズル 見ましたね。

ヒルマ ハイ々々。見せていただきましたよ。(ト、いつてしまつてからあわてて) イ、イヤイヤ、その、ボクがいったのはですね、きのうの放課後に豆腐屋に寄つて冷奴を買つたところですね、あんまりおいしそうだったもんで、ついその場で、つまり豆腐屋の……

ヒルマ・カスミ (二人声を合わせて) ミセでいただきましたよ、と。

ユズル これはこれは。カスミちゃんも一緒で。

生徒たち 標的の暗号名は……。

ユズル オホン。(ト、制し) 諸君。口と尻の軽い子も盗み聴きする悪い子と同じおシオキが待つていますよ。

生徒たち (ひきつって) ソワカ。

ヒルマ アイヤ、どこにでもいるんですね、口と尻の軽い子、それにヒトの話を盗み聴きする悪い子。

(ト、カスミに) ね。

カスミ そうそう。そーゆー悪い子はもうショーがないから素ッ裸にひんむいちゃつてさ……。

ヒルマ そうそう。口にタコの頭でも詰めこんじゃつて……。

カスミ ついでにお尻の穴にはニンジンぶちこんで……。

ヒルマ 体中にケチャップなんか塗つたりくつたりしちやつて……。

カスミ その上で冷奴の納豆和えでもつくりながら……。

ヒルマ・カスミ (二人声を合わせて) 盆踊りのひとつも踊るしかないですね、ハイ。

ユズル ……(ハッと気付いて) やっぱり見てたんじゃないか。

ヒルマ・カスミ し、しまった!?

ユズル さあ、諸君。この二人の記憶を抹消するのです。

生徒たち、狂乱狂舞の体でヒルマとカスミに迫る。

こちら他人の手と闘いながら机にへばりつくもう一人のヤスベ、絶叫をあげる。

もう一人のヤスベ やめろオツ……カスミ、逃げるんだ。戻つてくるんだ、カスミ!

もう一人のヤスベの絶叫が二十年前の保健室に響した。

ユズル だれだッ!?

カスミ ヤスベ……?……ヤスベ……ね。

ユズル (ただならぬ気配を察し) カエサル。この場はボクに。

カエサル、退場する。

入れかわりにヤスベが現れる。(アツという間もあればこそその早替わり)

ヤスベ 迎えにきたよ、カスミ。さあ、家へ帰ろう。ボクたちの新しい家へ。

それぞれにそれぞれの思いをこめて……暗転。

闇のなかで小さなライターの火がともる。
机の前でもう一人のヤスベーがつぶやいていた。

もう一人のヤスベー ……ごめんよ、カスミ。なにかが狂ってしまった。ごめんよ、ヒルマ。ボクにはもうどうすることもできないんだ。……ごめんよ、ヨキコ。ごめんよ……和正。

ト、描いたばかりの原稿に火をつけようとする。

亀吉、すぐにとめに入る。

亀吉 やめろ。

もう一人のヤスベー 放してくれよ。

亀吉 ナガヨさん。

もう一人のヤスベー こうするしかないんだ。

亀吉、ライターをとりあげる。

亀吉 ナガヨさん。本当のことをいってください。ヒルマというのはだれなんだ。(ト、書類の束を見せ)あなたに関するボクの資料にはまったく見当たりません。戸籍にもその影さえとどめぬあなたのお兄さんというのとは一体だれのことなんだ。(アルバムを開き)さっきお借りしたこの中学の卒業アルバムにだって、ヒルマなんて少年はどこにも存在しないじゃありませんか。

もう一人のヤスベー こんなはずじゃなかったんだ。(ト、右手をかざして見て)ボクの……明るい明るいミキ。ここにあったんだよ。この右手のなかに。

アツと思う間もなく、もう一人のヤスベー、机の上に置いた右手に左手でナイフを突き立てる。
机から流れおちる赤い奔流。

亀吉 (とびつき) なにをするんだ。

もう一人のヤスベー (血したたらせ) カスミイーツ!

亀吉、手当のためもう一人のヤスベーを下手へ連れ去る。

一方こちら、迫り来る猟奇の嵐の予感に震えながら、ジツと夜に耐える舞台奥の二十年前のナガヨ家から突然のカスミの悲鳴が!

見れば、ベッドの前に立つヤスベーの右手が朱に染まっていた。一瞬呆然とそれを見詰めるベツドのカスミと傍のヒルマ。

ヒルマ ヤスベー君!?

あわててヒルマが包帯がわりに取り出したハンケチをヤスベー、奪うようにして、自分で傷口に巻きつける。

カスミ 一体どーなってるの。

ヒルマ わからない。

カスミ 影の番長ね。この家のどっかに隠れてるんだわ。

ヒルマ しかし、彼らが狙ってるのはヤスベー君じゃないはずだが。(ト、カスミに) ねえ、カスミ君。

カスミ や、やめてよッ。

ヤスベー あの火の見櫓より月が高くなるまではやって来やしないさ。

ヒルマ 鍵たしかめてくる。

ヤスベール ヒルマ。実は二人にきいてほしいことがあるんだ。ボクね、木当はトシ、サバよんでるんだ。ヒルマ・カスミ エエ!?

ヤスベール ワザとじゃないんだよ。そりや変だとは思ってたよ。学校行くといつも「今日はPTAですか」ってからかわれるし。でも、たったいまこの傷のおかげで思い出したよ。ボクね、本当は未来人なんだ。

ヒルマ・カスミ まるでマンガ。

ヤスベール マンガなんだよ。

ヒルマ・カスミ エエ!?

ヤスベール これはマンガなんだ。それで、ボクはね、五年前まではこのマンガの作者だったんだ。

間。

いきなりカスミとヒルマ大声あげて笑い出す。

ヤスベール どう。ボクの話、コワくなかった？

ヒルマ ぜんぜん。

カスミ ヤスベール、つくり話ヘタなんだもん。

ヒルマ でもその血のりはなかなか演劇的だったよ。(ト、ヤスベールの右手に巻かれたハンケチを勝手にはがし)アレ、傷までチャンとつくったんだ。ヘエー、ハハハ々々……(ト、バチバチ傷をたたいて)ボク、鍵たしかめてこよつと。

ヒルマ、上手に去る。

痛さに顔をしかめるヤスベール。

カスミ (アクビして)あたし、眠たくなっちゃった。

ヤスベール ダメだ。今夜は眠っちゃダメだよ、カスミ。影の番長と闘わなくつちや。

カスミ じゃもつともつとコワーいお話してくれなきゃね。

ヤスベール きつとこんな夜が前にもあったんだ。ボクたちの新しい家をつぶそうとする嵐の前の夜のこと。結局ボクたちに勝ち目はないのかもしれない。でも問題はね、そのたびにボクたちが努力したってことなんだ。

カスミ、アクビをしていた。

ヒルマ、戻ってくる。

カスミ どうだった？

ヒルマ 完璧。絶対だれもこの家に入れるもんか。ハハハ……。

ヒルマ、後ろを向くと、その背中に「今宵参上！カエサル」と書かれた紙が五寸釘で打ちつけてあった。

ヤスベール・カスミ それは!?

ヒルマ エッ!?

ヤスベール (紙をはがし、読んで)「今宵参上！カエサル」……ウーム。いま戸締りは完璧だつていつたね。ということは、これは完璧な密室殺人だ。

ヒルマ 殺人はまたこれからだよ。ねえ、カスミ君。

カスミ あたしにフルなって。殺されるのはあたしなんだから。

ヤスベール だれがおまえを殺すなんていったんだ。

ヒルマ キミじゃないか。

ヤスベール ボ、ボクがいうわけないだろ、密室殺人なんて。

カスミ あのねえ、あたしからも二人に話があるの。二人に悪いと思って黙ってたんだけど、あたし本

当はね、カエサルなんて全然ーコワくねーんだよ、バーロー。
ヤスベー・ヒルマ ……(顔見合わせ) コワいわア。

カスミ あたしのことはね、だれにもどーにもできないのよ。だって、あたし本当はね、生まれなかつたの。

ヤスベー (怒気強く) カスミッ。

ヒルマ 生まれなかつたって、じゃ、いまここにいるキミはだれだい。

カスミ マンガ。

ヤスベー・ヒルマ マンガ!?

カスミ ハイ。これであたしのコワーいお話はおシマイ。

ヒルマ アイヤー、こりゃ一本いかれちまったな。ハハ……。

カスミ 今度はヒルマ、話して。

ヒルマ そ、そりゃまずいよ。

カスミ どーして。

ヒルマ 自分で考えただけでもうコワくてコワくて。

カスミ なになに。

ヒルマ ダメだつて。

ヤスベー 話せよ、ヒルマ。

ヒルマ スッゴークコワイよ。

カスミ いいからお願いッ。

ヒルマ どうなつても知らないからね。じゃ話すよ。……実はね、ボクは本当はねー女なんだ。

間

ヤスベー・カスミ コワいわア!

ト、いつてのたうつ。

ヒルマ アア、ダメだ。自分でもゾツとしちゃつた。どーしよ。どーしよ。

ヤスベー ……ねえ、ヒルマ。和正は知らなかつたのかい。

ヒルマ 知つてたらボクをこの家に置いたりするもんか。あの人はシエガレか欲しかつたんだ。

カスミ ヒルマはどこで生まれたの。

ヒルマ え?

カスミ 家族はいないの? どーしてウチにもらわれたの。それとも、さらわれたの!?! 和正にさらわれたんでしょ。ーねえ、どーしていつもなんにも教えてくれないの。

ヒルマ ボクはもらわれたんでもさらわれたんでもないよ。ボクはここで生まれてここで育つたんだ。

ヤスベー え?

ヒルマ ヤスベー。だからボクはキミがこの家で生まれた夜のことだつてちゃんと覚えているよ。

カスミ ヤスベーも夜中に生まれたの。

ヒルマ 人はたいいてい夜に生まれて夜に死ぬもんさ。

カスミ どうして。

ヒルマ カスミどんな生き物も体の中に自分たちだけの時計をもっていてね、その時計の刻む時にあわせて動いているんだよ。

カスミ あたしの時計はどこにあるの。

ヒルマ ホラ、この、頭のうしろの裏側さ。

カスミ こんなところにあつて、うるさくないの。

ヒルマ だからヒトの耳はみんな前向きについてるだろう。夜眠るときに枕をするのもね、時計の音をふさぐためなんだ。

カスミ あれは枕の音じゃなかつたのね。遠い夜汽車の汽笛のような……。

ヤスベー 電線とつむじ風のダンスのような……影絵の町の屋根から屋根を行進する人さらいの足音のような……。

夜の音たちが津波のように部屋に流れこむ。
そのなかをユズルを先頭に夜の子供バンドの行進が横切る。

ヒルマ 鍵、もう一度みてこようかな。

ト、上手へ去る。

ヤスベール ……そうなんだよ、カスミ。こんな夜が前にもあつたんだ。ボクたち、本当はだれかのマンガの登場人物で、そのだれかは手をかえ品をかえ、同じ夜の物語をボクたちに繰り返させようとしているんだ。何度も何度も。でもなぜなんだ。どーしてー。

カスミ 疲れるだけよ。

ヤスベール え？

カスミ そんなこと、はじめつからみんなわかっているのよ。でも疲れるからだれも考えないだけ。この夜は何回目の夜だろう、なんて思い出したら、ゼーゼン眠れなくなっちゃうんですね。

ヤスベール そんな、三球照代じゃないんだから。

カスミ あなた、マンガ嫌いでしょ。

ヤスベール わからない。きつと……。

カスミ きつと？

ヤスベール ボクね、これでもマンガ家やってたんだよ。

カスミ 五年前でしょ。

ヤスベール ちょっと昔の未来のお話。……（独白めいて）いくら与えられても満たされない心。ボクはその心を満たしてやろう。その心が傷ついているなら癒してやろう。そう思うのです。……

カスミ 生まれてこれなかった思い。そうなければいいアと思いつながらにしまったこと。そのときは思いもかけずにいたこと。やりそこねたこと。……あたしはマンガ。

ヤスベール、後ろからカスミの肩をソツと抱いていた。

ヤスベールの手にもぐるおいしい力がこもって、次第にカスミの喉をしめあげる。

カスミ （もがくように）ヤスベール。痛いわ。……ちょっと放してよ。……ヤスベール。なにする気ツ。

ヤスベール （顔を黒い影にして）放さないよ、カスミ。ボクたちはズツと一緒さ。カスミ。……

そこへ時間の穴をくぐってもう一人のヤスベールが彼方の世界に出現、ヤスベールをカスミからひきはなさんとする。

三人、一体化したごとくになってもみ合う。

もう一人のヤスベール 放すんだ、ヤスベール。

ヤスベール だれだ。

もう一人のヤスベール ボクはキミだよ。

カスミ 息ができないわ。

もう一人のヤスベール 死んでしまっぞ。

ヤスベール 黙れ、もう一人のボクツ。

もう一人のヤスベール カスミが死んでしまっぞツ。

ヤスベール、ものすごき力にてもう一人のヤスベールを突きとばす。

もう一人のヤスベール ボクは負けないぞ！

ト、めげずに起き上がり、再びヤスベールにとびつく。

ヤスベー ボクは負けないぞ！

ト、執拗にやりかえす。

二人のヤスベー、口々に「ボクは負けないぞ！」と叫びつつ、再度カスミと一体化してもみ合う。

が、ついにヤスベーのパンチにもう一人のヤスベー、気を失って倒れる。カスミ、ベッドの上でふるえている。

ヤスベー（カスミに）さあ、おやすみ。フトンに入って。目をとじるんだ。あの火の見櫓よりお月様が高くなる前に。

もう一人のヤスベー（モーローとしつつ）ヤスベーツ！

ヤスベー（次第にベッドに近づきながら）こわーい人さらいのオジサンがやって来る前に。おやすみ、

カスミ。

ヤスベー、ベッドに上がり、カスミの喉に手をかけ、しめあげる。

カスミ、もはや悲鳴すら出ない。

もう一人のヤスベー ヤスベー。キミは和正じゃない。和正じゃないんだアツ！

突然。ヤスベーの体から憑きモノがおちたように力が失せ、ヤスベーは泣きながらベッドから下りると床にくずおれる。

もう一人のヤスベー ヤスベー。

ヤスベーに歩み寄るカスミ。

カスミ ……姉ちゃん。ちよいと姉ちゃん。そないなところでなにしていますねん。

ヤスベー ……ごらんのとおりですわ。

カスミ こない道の真ん中になてもうてからに。

ヤスベー ほっといてんか。

カスミ いつからこんななっていますねん。

ヤスベー ……（顔を上げ）カスミ。ボクね、和正が許せなかったよ。あんなにシエガレが欲しい、シ

エガレが欲しいっていつてたくせに、女の児しかつくない和正。ボクね……ボクね……。

もう一人のヤスベー まにあつてよかった。

ヤスベー カスミ。ボクと一緒にいてよ。

もう一人のヤスベー そう思いさえすればいいんだよ。

カスミ あたしは生まれてこれなかったあなたの妹。あたしはマンガ。

ヤスベー ヨキコが死んでしまったんだよオツ。新しい家が……新しい家が……。

もう一人のヤスベー キミのせいじゃないよ、ヤスベー。

そこへヒルマが戻ってくる。なぜか女らしい格好。

ヒルマ ヤスベー!?

ト、ヤスベーに駆け寄る。

カスミ ヒルマ。どーしたの、その格好。

ヒルマ あたしだつてたまにはきれいなべも着てみたい。

カスミ いえばよかったのに。

ヒルマ ヤスベー。戸締りは完璧だよ。ウサギ一匹だつてこの家に入れるもんか。

ト、いう舌の根もかわかぬうちに一匹のウサギ、懐中時計を気にしながら、「ヤレヤレ、遅くなっちゃうぞ……」などブツブツいいながら横切る。ナンバにソックリである。

カスミ ヒルマ。いま戸締りは完璧だったね。
ヒルマ ちゃんと鍵かけてドアも窓も……

ナンバウサギ、いきなりピョンととんできて……

ナンバ 締切りです。

ヤスベ― ナンバ君!? ラビット書房のナンバ君だろ。

ナンバ (ポーズして) 原稿ください。

ヤスベ― どーもはじめまして。

ナンバ とぼけんでください、先生。こんなナリしてまで先生のあと追ってきたですよ。ヤスベ―でもボクたち、いまはじめてあつたんだよ。

ナンバ 時系列にこだわりますね、先生。マンガじゃないですか。ね。パーツといきましょう、パーツと。ヤスベ―でも、いくらマンガだからって……。

ナンバ アーア。その理屈っぽいところがなくなったら先生のマンガもおもしろいんだけどなア。ホラ、先生、カスミさんはホントにいつ見ても美しいし、ヒルマ君だってホントにいつ見てもヒルマ君だし。

ヒルマ あたり前だったて。

ナンバ こんなにステキなキャラクターがいるんだから、(もう一人のヤスベ―を示し) こんな薄暗い暗室みたいな顔したもう一人のボクなんて登場させてマジメぶるのはやめちゃって、ね、パーツといきましょう、パーツと。

ヤスベ― そうだね。パーツといこうか、パーツと。

皆。ドツと笑いこぼる。

もう一人のヤスベ―のみ、さみしそうに……。

もう一人のヤスベ― さよなら、ヤスベ―。もうボクの出番は終わりだね。

もう一人のヤスベ―、包帯を巻いた右手をさし出す。

ヤスベ― その手……。

もう一人のヤスベ― 明るい明るいミキへ向けて。

ヤスベ― ありがとう。もう一人のボク。

二人、しっかりと手を握りあう。

そのトタン、フツと消えるもう一人のヤスベ―。

カスミ ヤスベ―。ホラ、空がシラけてきたわ。

ヒルマ ホントだ。なんてシラけた空なんだ。

カスミ (ベッドの上に起ち) やったのよ、ヤスベ―。朝だ! 徹夜だ!

ト、いうや名残りの闇からはい出したような一群―夜の子供バンドがユズルに導かれてやって来る。

ヤスベ― (ハッとして) カスミ!

ト、近寄ろうとするのにユズルがわりこむ。

ユズル ヤスベール君。いよいよわれらがメメント・モリ計画のファイナーレです。

夜の子供バンド、ヒルマをベッドに押し上げ、白いヴェールをかぶせる。
ベッドの上でまるで新郎新婦のように並ぶカスミとヒルマ。

ヤスベール なにをするんだ。

ユズル 結婚式です。(ソロバンとり出し)みなさまのご家庭になくてはならない結婚式……でありますからして、ここはひとつこのくらいの線で。

ユズルのソロバンをのぞきこんでいた夜の子供バンドのロンちゃんロボット……。

ロボット イヤ々々、そこんとこひとつこれで……ちゃ。

ト、ご破算にする。見ればロボットの顔は父である。

ヤスベール 和正!?

父 ヤスベール。めでたいな。

夜の子供バンドの怪人笑い仮面がマスクをとり、ヤスベールに語りかける。母だ。

母 あなたはめでたくありませんか、ヤスベール。

ヤスベール ヨキコ……

母 わたしたちはたくさんたくさんめでたいですよ。いつかの夜をグルグル巡るメリーゴーランドからやつと降りられるのだから。

ヒルマ ヤスベール。黙っていてごめんよ。実は、ボクはカスミと……。

ヤスベール でもヒルマ、キミは女じゃなかったのかい。

ヒルマ そりゃまあ、そうだけど。いいじゃないの、マンガなんだから。パーツとやろうよ。パーツと。

全員、バカげた大笑い。

ヤスベール そうだったのか。知らなかったのはボクだけか。ボクは……。

ナンバ カスミさん。結婚したあとも仲良くしてください。だってボク、あなたが……。

カスミ あまり締切り々々ってウルサくいわなければね。

ナンバ ハイ。(手帳をとり出し)で、カスミさん、将来の抱負は?

カスミ 新しい家をつくるんです。

ヒルマ そしてその家をボクたちはこう呼ぶことにします。「現代少女マンガ全集」!

拍手。

ナンバ ウン。これはいけるぞ。さっそく編集長に電話してこよッ。

ト、去る。

ユズル 今宵ご列席の諸君。夜もシラけてまいりました。最後に今宵の主賓のおコトバを。

全員 ソワカ!

ユズル 闇の帝王。別名影の番長。こと、カエサル様のお通りだいッ。

拍手につつまれ、ヤスベール、無理矢理ベッドに押し上げられる。

ユズル、ヤスベールにペンを渡す。

ヤスベ― みなさん。もしボクにひとことを許してもらえるのなら、新しく誕生する現代少女マンガ全集は、めくるページのその背から消えてゆくインキで描いてほしいのです。これはボクの、いわゆるひとつの希望です。夜の向こうにボツンと小さな穴のように見えてきたあのシラケた空をくぐりに、いわゆるひとつのパーツ、をやるうではありませんか。（ペンを頭上に掲げ）めくるページのその背からパーツ……

虚空にペンをふるう。

地殻からとどろく低いうなりと目まぐるしい閃光のなかで、登場人物たち、ひとりまたひとりと消えてゆく。

ヤスベ―の立つベッドがグルグルと廻り始める。

ヤスベ―（なおもペンをふるつて）消えてゆくインキでパーツ！いわゆるひとつのパーツ！パーツ！

ヤスベ―、ベッドの上に倒れこんだ。

同時に世界に静寂が訪れる。と、そこはヤスベ―の仕事部屋。

登場人物たち、もはやあとかたもなく、亀吉がヤスベ―の右手からペンをとりあげ、包帯を巻こうとしていた。

亀吉 ナガヨさん。そんなに手を動かしたら包帯がうまく巻けませんよ。

亀吉、ヤスベ―の右手を包帯でグルグル巻き。

そこへ下手からナンバがかけこんで来る。ウサギの面影はどこにもない。

ナンバ 先生。電話したら編集長、ノッチャつてもう……。 （ベッドの二人に気付き）先生、その手ッ!?

亀吉 とりあえず応急処置だけはしておきましたが。

ナンバ 先生になにをしたんだ。

亀吉 自分で刺したんだ。ボクを悪役にしようとしてもムダだよ、ウサギくん。

ナンバ （ベッドに行き）なんでそんな……。

亀吉 こう見えてもボクは医者もできる弁護士亀吉です。その手ではもうペンを握ることはムリですよ。

ナンバ なんてこというんだッ！

亀吉 オオツと。キミはどーしてもボクを悪役にしたいらしい。

ナンバ 用がないなら帰ってくれ。

亀吉 まあ、詳しい書類は郵送することにして……（ト、帰り仕度して）イヤ、そんな必要もないか。（ト、十円玉をヤスベ―に握らせ）ソラ、ナガヨさん。この十円玉はあんたに渡すよ。ま、それでも天気予報をきくくらいの役には立つかもしれない。……ではボクはこれで。さよなら、ウサギくん。またいつか勝負の日まで。ハハ々々……

ト、いうだけ行って去る。

ナンバ （亀吉の背に）十円玉をバカにするなよ。二十五円で家を建てようとした人だっているんだぞ。天気予報は大切だ。台風はもうそこまできてるんだからな。それからボクはウサギじゃない。ピーターラビットだ。……（首かしげ）なにいつてんだろ。

ト、いいながら机に寄り、描き上がった原稿を封筒に入れながら……。

ナンバ 大丈夫、先生。きつとまた描けるようになるって。右手がダメなら左手だつていいじゃない。

光る左手。ナンチャッテ。(原稿をもち、ベッドへ)先生。とにかくこの原稿突つこんだらまた来ます。編集長ノッチャつてもう。次号は巻頭ですよ。――そいじや。(ト、去らんとして)先生、マンガ嫌いですか。

ヤスベ―、うつむいたまま。

ナンバ ボクはね、マンガ、大好きですよ。

ナンバ、黙ってやさしく去る。

ヤスベ― (ナンバの去ったことに気付かず) ……ねえ、ナンバ君。しずかな夜だね。なんだかボク…
…ながいながいボクのみみしきは、こうして今夜ボクの思い出をキミに話すことのためにあつたんだ、そんな気がしてならないよ。ねえ、キミ、思い出してごらん、むかしこの夜の下で抱合あつてふるえたところのあつたことを。そしていま、どこかの知らない町で泣いている子がいることを…
…。ボクがボクの思い出を話したこのしずかな夜が、どうかキミの思い出のひとつかけらにでもなりますように…。ねえ、ナンバ君。(ト、ふり向けどその姿はない)ナンバ君。…。行っちゃまったのかい。ボクね、まだチャンと見直ししてなかったんだよ、その原稿。…。もう少しいてほしかったよ、キミにも。(机に寄り、クチャクチャにまるめたボツ原稿の一枚をひらいて)…。ボクたち、いつかまた会えるんだろうか。カスミ。…。ヒルマ。

ヤスベ―、歌い出す。

♪ さみしい夜の頃に 雨ににじむ赤いネオン
見上げれば ボクにグッバイ!
そつとつぶやくように 消えた

さみしい夜の頃に 通り過ぎる黒のオートバイ
見えない手が ボクにグッバイ!
名残り惜しむように 消えた

お願いよ だれかボクを いますぐ
連れてって 世界の果てまでも

(セリフ) カスミ。ヒルマ。ボクはきつと待ってるよ。ホラ、校庭のいちようの木だつてヒ
コーキのピラを待っている。野原のドカンだつてはい寄つて横たわる古いトカゲを待っている。ク
チャクチャにかんだチューインガムも、竹垣のいただきに乘せれば、いつか吹いてくるモンズー
ンを待っている。名残りを惜しんで待っているんだ。

歌い終わつてヤスベ―、ふと見ると机に小つちやいヤスベ―が座つてマンガを描いている。

ヤスベ― きみは!? ――ヤスベ―。

小つちやいヤスベ―、やつて来てそのマンガを見せる。

ヤスベ― え? これ、キミが描いたのかい。ゴジラ? ちがう? オリバーくん、じゃなくて…。

ヤスベ―、いろいろいうが全然あたらない。
しびれをきらしたように一匹のカエルが現われ、ヤスベ―の背中をたたく。
カエル、ヒルマにソックリさん。

ヤスベ― (ヒルマガエルに)オオッ。(ト、驚き)ヒルマ!?

ヒルマ だからね、よく見てよ。(ト、自分の姿を誇示し)カエルでしょ。
ヤスベアー ア、カエルかア。

ヒルマ そう。アクシやね、朝帰りしてもヒルマカエル。
ヤスベアー でも、いつからカエルやってんだい。

ヒルマ キミの生まれる前からズーとき。この家の庭先でホラ、キミともよく遊んだのに。

小つちやいヤスベアー、机からアルバムを持って来た。

ヒルマ そうそう。この卒業アルバムにだってチャンとうつつてるんだから。

ヤスベアー これ、ボクのアルバムだよ。

ヒルマ (アルバムの写真を指さし)ヤスベアーはここでしょ。それで、ホラ、この校長先生の靴の先。
ヤスベアー ア、ほんとだ。カエルが座ってる。

ヒルマ ヤスベアー。みんな待ってるよ、キミを。

ヤスベアー ボクを!?

ヒルマ 還ろう。

ヤスベアー ありのまま、本能のおもむくままだね。

ヒルマ 無機的本質への憧れ。ドーゾ。

ヤスベアー かつて全天の星々はただの一個の原子だったのである。ドーゾ。

ヒルマ 宇宙的ノスタルジアですね。ドーゾ。

ヤスベアー メメント・モリ。

ヒルマ さかしまに、キミからミキへ。

ヤスベアー でもどうやって。

小つちやいヤスベアー、紙ヒコーキをみせる。

ヤスベアー これにのつて? そ、そんな。

ヒルマ 燃料はそのピカピカの十円玉だ。

ヤスベアー ムリだよ。

ヒルマ 呪文を忘れたのかい。

ヤスベアー 呪文? そうか。呪文だ。

ヒルマ 還ろう。還れば。還るとき。アタシヤカエルよ。

ヤスベアー よオし。

ヤスベアー、紙ヒコーキと十円玉をそれぞれ両手に持ち---

ヤスベアー マラカブーラ、メチカブーラ、ビビディバビディ高木ブー!.....さよなら、ニジツセイキ。

ヤスベアーが、ヒルマが、小つちやいヤスベアーが、回転を始める。やがて三人の影が薄れ溶けるように。

---暗転。

エピソード

父を呼ぶ母の声がきこえる。

溶明すると、ヤスベアーの部屋にソックリな父の部屋。

机で居眠りする父、その頭はテレビである。

下手から母、登場。

母 和正。眠ってるんですか。

父 (目を覚まし)ア、アア、ヨキコか。

母 今日は締切りじゃないんですか。

父 ウン、わかつてる。

母 テレビの調子はどうですか。

父 すごくいいよ。まったくあのいまわしい事故のおかげで頭をテレビにとりかえてほんとうによかった。不幸中の幸いだね。

母 塞翁が馬くやつたな、ですね。

父と母、笑う。

そこへ上手から田手上ハジメ登場。

田手上 こんにちは。ムジナ出版の田手上です。

母 ホラ、締切りがやって来ましたよ。

田手上 イヤー、蒸すですね。台風近づいてるですって？ ところで先生ー！原稿ください。

父 ハイハイ。できてますよ。

田手上 (原稿うけとりながら)先生。これはウチの編集長の意見なんですけどね……。父 なんです？

田手上 いや、どうも似合わないってね、その、少女マンガには。

父 わたしが少女マンガ描いちゃいけないんですか。

田手上 イヤ々々、だからペンネームですよ。

父 ヤスベーじゃダメですか。

母 あれなんですよ。ちよつと、わけありで。

田手上 (母の小指をかんで)どんなわけです？

母 まあ、田手上さんたら、すぐに小指を噛んで。あたしはイタイ。

田手上 ア、これは失礼。(ト、小指をはなし)どーも昔の葬儀屋時代のクセがでちまって。

三人、わけもなく笑った。

田手上 それでそのわけというのは……。

父 生まれるはずの子供にね、名前をつけたんですよ。

母 ええ。ヤスベー。

田手上 男の子だったんですね。

父 もちろん、だれがなんてたって男ったら男。

母 わからないんですよ、生まれなかつたんですから。

田手上 ……きかせていただきましたよ。それでは。

ト、去らんとして立ち止まり、足下に落ちていた紙ヒコーキを拾う。

田手上 先生。こんなモノが。

父 (受け取り)え？

田手上 ……わたしにもね、そういうシエガレがいたんですよ。

田手上。さみしい背中中去る。

父、紙ヒコーキにはさまれた十円玉を見つける。

母、紙ヒコーキを解体する。

父 アリ……十円玉。やった。ピカピカだ。マッサラだぜ。

母 和正。これ、電報ですよ。……(ナガヨー・ヤスベー先生)……。……

父 エ!? だれからだい。(ト、手にして)なんだ、これ。消し印が二〇二一年になつてるぞ。

母 エエ!? 二十五年未来から届いたんですか。

父 (母に電報を渡し) ……。

母 (読んで) 「さよなら、ニジツセイキ」。

父 (遠くはるかに) ヤスベー!!

彼方を見はるかす父と母の背後に白い光の点が浮かび、次第にそれは大きな大きな穴となって

……。

まばゆくシラケきつた光につつまれた「さかしまの王国」で、ヤスベーが、ヒルマが、カスミが、手をふっている。

いつまでも名残りをおしむように、ニジツセイキへエールをおくりながら……。

——幕——